



バチカンから
きた印刷機



桐生敏明

バチカンから来た印刷機

——トマス荒木を歩く——

桐生敏明

旅のはじまり 2

第一章 秋月・加津佐・天草の旅 10

第二章 ローマへ 51

第三章 フィレンツェへ 129

第四章 ローマの心残り 158

第五章 マカオへ 165

旅のおわり 189

旅のはじまり

トマス荒木という人物がいる。十六世紀後半から十七世紀前半を生きた人物だ。彼は摂津を支配する荒木村重の一族として生まれた。と言つても、血筋がつながっているというだけで、ただ一族の端っこに名前を連ねていると言ふに過ぎない。決して身分の高い家柄ではなかった。

その主筋に当たる村重が信長に謀反を起こした。はつきりとした原因はわからない。信長個人への反感か、野心のためか、ともかくも村重は本願寺と手を結び信長に反旗を翻した。外面的にはどう見たところで本願寺への加勢としか見えない。

村重の部下には一向宗徒が多い。と、同時にキリシタンも少なからずいる。それは、村重の右腕とされた高山右近からしてそうであり、その影響が大きく働いているからであろう。彼らキリシタンにしてみれば、邪教である本願寺に味方しての命のやりとりなど、いかに主命とはいえ本意ではない。ために落城を前に城を捨てた者が数多くあった。



信長に攻め滅ぼされた有岡城址（大阪府茨木市）

トマスの母もそうであった。

夫は流れ弾に当たってあっけなくこの世を去った。母親としても、熱心なキリシタンとしても、彼女は城にとどまるわけにいなかった。落ち行く先は九州……、といって幼い子供を連れたの逃避行は無謀だ。母はトマスを高山右近に預ける道を選んだ。

「必ず迎えにくるから……」

その日、トマスは母の声をおぼろに聞きながら、老いた叔父の冷たく固い甲冑の背に負ぶされ、城を落ちていった。トマス、三歳の頃であった。

ところで、村重反乱に当たって、信長が真っ先に手を打ったのが、村重の



有岡城の礎石建物跡と井戸跡

右腕とも言える右近の懐柔策である。信長は右近の動きを封じるため、キリシタン宣教師を人質に取った。右近が村重に味方するようであれば、日本のキリシタンを根絶やしにするであろうと。

言葉だけの男ではない。かと言って、村重のもとには二心なきことを誓うため、家族を人質に出している。どちらにも動けない右近であった。思いあまって、父タリオ飛騨守は村重に味方し、右近はキリシタンとしてすべてを捨てて出家する道を選んだ。

信長にとっては、それで十分だった。出家し中立を守ろうとする右近を却って重く用い、その仲介に当たったイエズス会宣教師をも、今まで以上に厚遇した。そうすることで籠城側に右近の寝返りを強く



赤山右近像（大阪府高槻市）

印象づけ、その士気を阻喪させることをねらったのである。

やがて有岡城を包囲する旗印の中に、右近のクルスの旗印が翻ることになった。

右近が寝返った……。少なくとも籠城側にはそう映ったし、結果として事実はその通りでもあった。

もはや、落城は時間の問題である。

ところで、トマスの母が右近を頼ったとき、右近は苦衷のまっただ中にいた。同じキリシタンとはいえ、村重の部下や一族のものを匿うわけにもいかない。ただ幼いトマスだけが、高槻の城に密かに匿われることとなった。そして、この高槻の地で、トマスは、三歳から六歳までを過ごすことになる。

六歳になったとき、信長の城下安土にセミノリオが造られた。イエズス会巡察師バリニャーノ神父



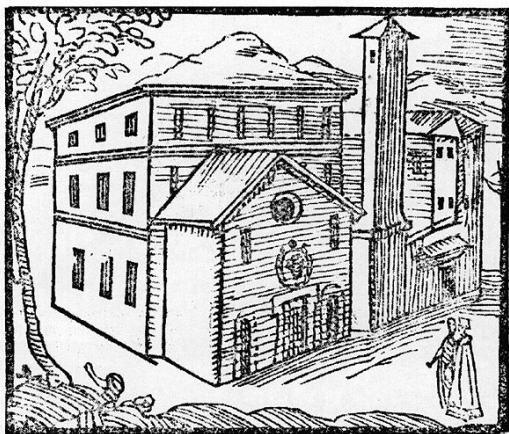
安土セミナリオ址（1975年、石碑が建てられた当時の状態）

の働きによるもので、信長はこれを厚遇し、安土城天守ふもとの土地を与えたばかりか、大工などの手配から万事に至るまで全面的にこれを援け、安土城天守と同じ青瓦の使用まで許したという。

右近も、この工事を援けた。それは、ただ単に便宜を図る、経済的に助けるというばかりではない。毎日のように人夫に混じって材木を運ぶ姿は、まるで贖罪しよくざいの苦行でも果たすかのようなであった。

こうして出来たセミナリオに、その一期生としてトマスが預けられた。

生徒は六歳のトマスが最年少で、最年長が十五歳、およそ三十数名の生徒が集められた。多くは戦争で身寄りを亡くした戦国武将の子供たちや、熱心なキリシタン信徒



グレゴリオ 13 世伝に描かれた安土のセミナリオ

の子弟たちで、なかには自ら望んで入学してきた者もある。後のことになるが、秀吉の禁教政策に殉じ、二十六聖人の一人に列せられるパウロ三木も、この安土セミナリオの生徒として、この中にいた。

信長の異国趣味がにわかに花開いた。

巷^{ちまた}では西洋風の衣装が取り入れられ、キシタンでなくてもクルスをかけ、ロザリオを装身具のように扱うことが風潮となった。京都には三層の天主堂がそびえ、町の大通りには着物に首襟を着けた若者や、カルサンを袴代わりに履く人たちの姿が見られた。

安土のセミナリオでも、西洋音楽を学ぶ子供たちの声やオルガンの音が絶えることなく、信長自身、セミナリオを訪ねてはその調べに耳を傾けた。ヨーロッパを吹き抜けたルネッサンスの光と闇が、この日本をも、ようやく覆い始めようとしていたのである。

ところで安土セミナリオにとつての最大の不幸は、その最大のパトロンである信長が、セミナリオの出来た翌年、早くも亡くなつてしまつたことだ。いわゆる本能寺の変が起こり、信長は明智光秀によつて京都本能寺に誅せられた。しかも争乱は京都だけにとどまらなかつた。光秀は、本能寺を襲うと同時に、信長の本拠安土をも襲わせた。ために安土セミナリオまでが、このとき、灰燼に歸してしまつたのである。

安土セミナリオの校長であつたイタリア人宣教師オルガンティーノは、生徒たちを連れ安土を脱出した。まず小舟で琵琶湖の沖島へ渡り、そこからさらに対岸の坂本へと逃げる。坂本は言わずと知れた明智の本拠地……。そこでオルガンティーノ神父らは、キリシタンを味方にしようとする明智の手で却つて保護され、争乱の中、その案内で京都南蛮寺へと落ち延びることができた。

この時から、トマス荒木の長い彷徨さまよひが始まつた。

そのトマスの旅が、やがてローマへとつながり、キリスト教の闇を見つめる旅になろうとは……トマス自身、恐らく気付いていなかっただろうが。



琵琶湖の沖合約 1.5 km に浮かぶ沖島



沖島の船着き場



安土にパウロ三木の顕彰碑が完成し、その除幕式にパチカンから使節が送られる。

第一章 秋月・加津佐・天草の旅

一、秋月にて

夏期休暇を利用し、秋月から島原半島を回る旅に出た。

旅行の目的は、トマス荒木がたどった安土から長崎への道のりの中で、今まで遂に行く機会のなかった島原のセミノリオ（カトリックの初等教育を施す学校）、コレジオ（同高等教育を施す学院）跡を訪ねるためである。

本能寺の変による安土セミノリオ焼失後、セミノリオは京都から高槻へ、さらに大坂へと移動し、島原半島にある有馬のセミノリオと合流し、島原の加津佐へと移る。またコレジオのほうは、当初、大分に設けられたものが、山口へ移動、さらに島原半島の千々石、有家を転々として加津佐に落ち着く。そして、この加津佐のセミノリオ、コレジオ跡を訪ねるのが今回の旅の大きな目的だった。

「なぜ、そんなことを」と言われると、ただ行ってみたかった、自分の目と足で、



福岡県・秋月の城下町（中村さんご夫妻に送っていただいた写真）

どうしても確認しておきたかったという
しかない。

そして、もう一つの大きな目的地が秋
月であつた。

それは、トマス荒木と長崎の豪商末
次家の並々ならぬ関係を感じるためであ
り、その末次家と縁りの深い場所の一つ
が秋月だったからである。

まずは友人の中村康一夫妻の家に泊め
てもらい、翌朝、夫妻の案内で福岡近郊
の秋月へと出発する。

かつて中村さんが福岡に引越すに当
たって、秋月が近くだと聞き、どうして
も行ってみてくれないかとお願いしたこ
とがある。

秋月には、かつて興味があつて調べた、

長崎代官末次平蔵の父、末次興善の屋敷があつたと言われており、しかも、なぜか、トマス荒木がローマへ渡った背景に、末次氏の匂いを感じて仕方がなかった。その末次氏の長崎進出前の拠点が博多であり、堺であり、秋月なのだ。博多、堺が末次氏のビジネス上の拠点とするなら、秋月はビジネスを離れた生活の、もつと言うなら精神的なバックボーンではなかったろうか。

この地で、末次興善はザビエルを迎え、その宿主となった。

秋月へ行きたいと思った。何も見つからなくても、この足で感じたいと思った。自分ではなかなか行けない。だから中村さんにせつついた。秋月へ行つてほしいと……。

それが、今年の春になって、中村さんの奥さんから、次のような手紙と写真を頂いた。

前略 お元気ですか。

春に桜を見に秋月へ行きました。すぐに写真をとりましたが、両親が二週間ほど来ていまして、忙しく、こんなに遅くなってしまいました。

秋月は福岡県甘木市秋月町という城下町です。町の中に小川があちこち流れてい



秋月城址（福岡県甘木市）

て、水が清くて、とてもきれいでした。

郷土館という所で、桐生さんの話していた末次興膳という人の名前を見ましたので、館長さんに話を聞きました。資料にもありますが、この町に生きた人でした。中国人の方で、この地では興膳善入という名で親しまれていました。子孫は興膳という姓で、今もたくさんいるそうです。

この武家屋敷の縁側に座って、抹茶を飲んだり、日なたぼっこをしていたら、何か胸がいつぱいになりました。

長生寺という寺に興膳善入の墓というのがあり、百二十四歳まで生きたそうです。墓まで後一〇〇メートルという札を見たら、心からワーツとあふれてきて、

このまま行ったら墓に抱きついてしまいそうで、墓まで行く勇気が出ませんでした。涙だけがあふれてきてしまった……。

きっと私も主人も、この地で暮らしていたと思います。

小さな町ですが、なつかしく穏やかでした。小川の水辺に咲く菜の花が美しく、そして、もの悲しさのある町でした。

桐生さんも是非いらしてみてください。

きっと郷土館の館長さんと話しも合うと思います。

興善と興膳……私が知る人物は末次興善。中村さんが秋月で見てきたのは興膳善入。しかも興膳善入は中国人だという。末次興善は平戸の木村氏の出であり、博多の商人末次家に養子に入って末次興善を名乗った。写していただいた写真を見ると、興膳善入の洗礼名は「ドミンゴス」となっている。末次興善の洗礼名は「コスメ」……どうも別人のようだ。

でも、違うと言いたい切れない。根拠はないが、何か深い関わりを感じる。どうしても行かずにいられなくなる。

八月の末に仕事で福岡に出かける。それに合わせて秋月へ行こう。その後、島原



秋月郷土館で、中村夫妻、佐藤夫妻と史料を漁る。

へも足を延ばそう。そう決めて中村さんにも連絡をとった。案内してほしいと……。

そして秋月に来た。

秋月で佐藤さん夫婦とも落ち合う。佐藤さんは福岡に住まいする方で、秋月を訪ねた後、島原半島を車で案内してくれることになっている。こうして中村さん夫妻、佐藤さん夫妻と共に秋月郷土館を訪れ、館長と話し、「秋月史考」をひもとき、興善の屋敷跡を訪ねる。

結果、長崎代官末次平蔵の義理の兄の存在が浮かび上がってきた。

貿易商末次興善は明国との関わりが深い。史伝によれば十六世紀初頭、明国は

既にその北辺が騒がしくなつてきており（やがて十七世紀に入り明国は滅び清の時代を迎えるが）、その動乱に紛れ、明国の王族の子が、貿易のため明国を訪れていた末次興善に託されることとなった。

末次興善は、この子を長崎に連れて帰り養子とする。

これが興膳善人だ。

ところが、やがて興善に実子が誕生し（末次平蔵）、興膳善人は末次家の屋敷があった秋月へと移る。これが興膳家の起りのようだ。

興膳善人が起した長命寺を訪れる。かつて中村さんたちが「墓まで後一〇〇メートル」というところで、遂に行けなかったという興膳の墓があるところだ。

佐藤さんをはじめ、皆、一様に重いものを抱えたようになる。佐藤さんのご主人が「みんな受け入れんといかんですよ」と明るく話される。私は「受け入れるぞ」「受け入れるぞ」と冗談まじりに話す、肩に力が入っている。中村さんの奥さんが「そんな……まるでおまじないのようだ」と冗談を言われ、笑った拍子にふーっと肩から力が抜けた。

長命寺が見えてきた。

その山門前から道は左へ折れ、山道に沿うように墓が並ぶ。末次家と興膳家の関



興膳家の墓所（福岡県甘木市秋月町）



興膳善入の墓（福岡県甘木市秋月町）

係を裏付けるように、まず「末次家之墓」があり、それから奥に道をたどると、「興膳家之墓」があった。道標に導かれ、さらに奥へ緩い山道をのぼっていく。佐藤さんの奥さんと、中村さんの奥さんはここに残ることになった。

もう少しで興膳善人の墓に着くというそのとき、道の曲がり角に地蔵があった。ところが首がない！ あの時もそうだ。

二十年前、長崎の唐土山に末次平蔵の菩提寺春徳寺を訪ねた。寺の裏山が岩の切り出し場になっており、その山頂近くに末次平蔵の石龕せきがんを切り出そうとした場所がある。石工たちが平蔵の戒名を刻もうとしたところ、その戒名から血が流れ出したという。現実には、岩が鉄分を多く含んでいたため、掘った箇所が雨に打たれて錆びが流れ出したものであろう。

しかし、当時の石工たちは気味悪がつて作業を中断した。今も石龕としてくり抜かれた岩塊がそのままに残っており、中に不動が祭られている。そして、その両脇を何体かの地蔵が守っているが、そのどれにも首がない。ただ一人、山を登り詰め、その光景を目にしたとき、思わず全身総毛立ったのを覚えている。

偶然だろうが、今、また末次家の墓所近くで首のない地蔵を目にした。昔のことか思い出され、またぞろ全身を悪寒が走り鳥肌が立った。と同時に、何か胸奥から、



長崎市・春徳寺裏山に残された末次平蔵の石龕

叫び声とも泣き声ともつかぬものがせり上がってくる。叫びは声にならず喉にからみつき、なぜか涙だけが流れる。

やがて興膳善人の墓の前に立った。平静を取り戻し、感情的にならないよう事務的にしゃべっている自分を感じる。

トマス荒木は、末次興善の口利きで、実際にはこの興膳善人の後ろ楯でローマへ渡ることができたのかも知れない。

二、加津佐コレジオ跡

秋月で昼食をとろうとするが休んでいるところが多く、やっと「黒門茶屋」という土産ものの屋兼食堂らしきものを見つける。ここでウドンを食べるが、これがなかなか旨い。コシがあるというか、モチモチしているというか、出汁も結構いける。佐藤さん夫婦の素麺・にゅう麺談義を聞きながら黒門茶屋のウドンに舌鼓をうつ。

昼食後、中村さん夫妻と別れ、いよいよ佐藤さん夫妻の案内で島原へと向かう。

当初は、中村さんと別れたあと、一人、島原鉄道で島原から北有馬、南有馬を経



加津佐セナリヨ・コレジヨ跡

て口之津へと下っていく予定だったが、佐藤さんが車で案内してくれることとなり、逆の千々石湾から加津佐、口之津へと向かうこととなった。このルートの変更に必要な意味があった。おかげで見るとべきものを見、行くべき場所へ行き、会うべき人に会った気がする。

ところでボーロという菓子があるのをご存じだろうか。かつて長崎のカステラの製造法を盗みに行った佐賀（？）の人間が、作り方を間違え出来たのがボーロだという。いわばカステラの出来損ないだというのが、これがなかなか旨く、名物となったという。

佐藤さんが運転しながら話してくれたエピソードだ。

そこへ奥さんが松露まんじゅうの話を始め、車の中が急に盛り上がった。

やがて車は諫早を離れ、しばらく行くと唐突に車の右手に青い海が広がった。千々石湾だ。道は高台を走り、蘇鉄の木々の向こうに真っ青な海を見下ろしている。

突然に別世界が出現した感じだった。

この海岸線を走ること一時間、最初の目的地である加津佐に到着した。

「加津佐のコレジオ跡を探しているんですが……」

角の自転車屋に入り道を尋ねるが、あいにく娘さんしかおらず要領を得ない。

「父なら知っていると思うんですが」と申しわけなさそうに頭を下げ、「少し先に町役場があるから、そこで訊いてみては……」ということになった。これがよかった。なまじ道がわかれば、史跡を訪ねてそれだけで終わったことだろう。

町役場に行き、事情を話すと二階の観光課に案内された。課員は一人だけ、事情を繰り返し話すと、急に顔がほころんだ。彼は私に椅子を勧めておいて、自身は書架へ行き、資料を持ち出してくるとおもむろに説明を始めた。そして一通り話が終わると、加津佐町役場発行の二種類のパンフレットと一枚の地図をくれた。一つは五十ページ程の、町役場の観光案内にしては豪華すぎるパンフレットだった。

時計を見ると、もう五時近くだ。探している間に暗くなつてはと思い、礼を述べ早々に出発する。

農協前で道は二手に別れ、教えられたとおりに右へ道をとる。資料によれば愛宕

山の中腹にセミナリオやコレジオがあったという。

セミナリオとはカトリックの初等教育をほどこす全寮制の学校、コレジオは高等教育機関であり、この他にノビシアードという修練院があった。

日本布教を始めたイエズス会は教育や病院、福祉に力を入れた。まず教会がつくられ、そして病院がつくられた。さらに捨て子を収容する施設がつくられ、巡察師アレックスandro・バリニャーノが日本を訪れるに及んで、各種の教育機関がつくられた。

まず有馬に、そして安土に……。しかし、有馬に一年遅れて出来た安土セミナリオ（琵琶湖東岸の安土城下）は、本能寺の変の戦乱で灰燼に帰し、京都から大阪へ、そして高山右近城下の高槻へ、さらに秀吉の禁教政策から逃れるようにして南下、やはり島原各地を転々としていた有馬セミナリオと合体して、既にコレジオのあった、この加津佐に設けられることとなった。

これら教育機関では、神学のほか、天文学、ラテン語、ローマ字、哲学、音楽などが、その課程において教えられた。特にラテン語は、初等教育から徹底的に教えられた。セミナリオの目的がキリスト教教理学習のための語学習得にあったのだから当然といえは当然のことであろう。

今、手元に当時のバリニャーノの指示による「セミナリオ生徒時間表」なるものがある。その全文を次に掲げておこう。

セミナリオ生徒時間表

一、夏期、四時半起床。司祭たちと共に祈り、五時頃終える。

冬季も同様にするが、各一時間遅らせる。時間変更は十月中旬から始め、二月中旬まで続ける。

二、祈祷の後、ただちにミサ聖祭に与り、次いで主祷文を唱え、六時まで残りの時間は座敷の清掃。

三、六時から七時半頃まで勉強し、学課を覚える。年少の者は教師の指示によつてラテン語の単語を学ぶ。

四、七時半から九時まで、ラテン語の教師と共におり、宿題を見せ、暗唱したことを報告し、教師が読み聞かせることを聞く。その間、年少者は課業を学び、先生から課せられたことをする。教師は年長者も年少者もそれぞれに応じて指導し、混乱を生じたり、時間を無駄に費やさぬように配慮せねばならぬ。その際、彼はすでに高い知識を持っている幾人かの生徒に手伝わせてもよい。それらの生徒は年少者に

試問したり、彼等が書いた答えを訂正してやつたりする。

五、九時から十一時まで食事をし、休養する。

六、十一時から二時まで、日本語の読み書きをする。すでにできる者は、日本語の教師の命令に従って日本文の書状を認める。その教師は、学課を訊ねたり、習字を修正したり、すべてよく秩序立て、彼等が上達するようにする。

七、二時から三時まで、唱歌や楽器の演奏を練習し、残余の時間は休憩する。音楽においては、才能のある者を選出すべきである。教師は、数名のすでに上達したものを助手とし、これにより一人ずつに教える時間をより多く持つようにしてもよい。

八、三時から四時半まで、生徒はふたたびラテン語の教師と共にいる。教師はこのときに一つの文章を書かせ、彼等が進歩するのにもっとも適していると思われる、何か他の文章を朗読して聞かせる。教師は、年少者には、その間、ラテン語の文章の読み書きに留めるのが適当と思われる。なお残る夕食前の半時間、

すなわち五時までは自由時間とする。

九、五時から七時までに夕食をとり、休息する。

十、七時から八時まで、ラテン語を学ぶ生徒のために復習が行なわれ、年少者は、その間、日本文字、またはローマ字の学習、あるいはこの時間により

適していると思われる他のことをする。

十一、八時に良心の糾明をし、ロレトの聖母の連祷（夕べの祈り）をしてただちに就床する。

十二、その週に祝日がない場合には、水曜日に二時間だけ日本語の読み書きをし、一時からは自由時間とする。ただし、しばらくは聖歌の合唱、クラヴォ、ヴィオラ、その他の楽器の練習をせねばならぬ。

十三、土曜日の午前中は、その週に学んだラテン語の復習に専念する。食事語は二時間、日本語の読み書きをし、一時に学校が終わる。続く自由時間は、入浴や散髪、また告白の時間に充てる。夕食後は休養し、なお残る時間には、前半はこの時間に行なわれる霊的な話を聞き、後半は聞いた説教やキリスト教の教義について語り合う。

十四、日曜日と祝日には、昼食の後、別荘か野外に行つて、休養するか自由にする。雨が降ったり、非常に寒かったり外出できないときには、一日中、屋内で休養する。しかし音楽をする者は、しばらく唱歌や楽器の演奏に時間を充てる。

十五、夏期、非常に暑いときには、校長の判断に従い、勉強から解放して休暇をとらせ、数日間、休養のためにより多くの時間を与える。



加津佐のコレジオ跡（長崎県南高来郡加津佐町）

アレシャンドウロ（署名）

たどり着いたコレジオ跡は、山を切り開いたような住宅造成地の中にあつた。正面に山（愛宕山だろ）を見、左手は住宅地、右手に畑地があつて、その畑地の向こうが海になっている。この畑地に古い石組みが残っており、この一帯にコレジオやセミナリオがあつたのだろうか。

今となつては当時を偲ぶ何ものも残されてはいないが、周りを取り囲む山や海は、今も変わりはなだろう。海を眺めながら、しばし歩いてみる。夏の暑い時期には、セミナリオの生徒たちが、この海ではしゃいだのだろうか。海に向かいグレゴリア聖歌を練習する子供たちの声が、この高台に響いていたのだろうか。オルガンやクラブサンの響きが……と思いきや、付近の小学校のチャイ

ムが響いてきた。

時計を見ると、もう五時を過ぎていた。

佐藤さんと車へ戻る。今日の予定はこれまでだろう。今日の泊りを予約している口之津の国民年金保養所へと向かう。

三、国民年金保養所「口之津」で起こったこと

夕食を済ませ、露天風呂につかる。

囲いの向こうは遠浅の海になっており、目を閉じれば、ザザーツ、ザザーツと波の音だけが聞こえ、波の音の中にただ一人包まれたような感じになる。

島原の乱で四万人近い村人たちが死滅し、この地から村人が絶えた。幕府は大名たちに働きかけ、一万石につき一家族の割で、この島原半島への移住を呼びかけたのである。このあたりは小豆島からの移住が多かったといい、この地で有名な素麺は、小豆島素麺だと言われる。

一揆に参加し、原の城に籠城し、ついにこの地の戻ることのなかった人々。空に

なり、人の営みが跡絶えてしまったこの地に、波の音だけは変わらず響いていたのだらう。そんなことを考えていると、波の音の中に、死んでいった人たちの思いが込められているように感じた。

胸奥から嗚咽が込み上げてくる。

「元の生活の返りたい。耕し、魚を獲る生活が夢のようだ。帰りたい、あの毎日の営みの中に帰りたい。もう人の血も、自分の血も、誰の血も見たくない。ただ帰りたい、元の生活に帰りたい。わしらが一体何をした。一体、何をしたというんじや。ああ、帰りたい、帰りたい……」

そんな思いが、波の音の中に響いているように思えた。

そう言えば、この地は、島原の乱でただ一人、幕府に内通し助かった男、南蛮絵師・山田右衛門作の出身地でもあった。元の有馬の家臣であったが、有馬家移封に伴い、行を共にすることなく、この口之津に残り、絵師として暮らしを立てていた。それが有馬の後に入った松倉重政の圧政のため、島原の乱が起こり、彼も乱側の指導者の一人として、士気を鼓舞するための陣中旗を描いたり、矢文による通信の責任者として闘っていた。

そんな右衛門作が、幕府軍に内通の矢文を送り、幕府軍の総攻撃に際し、ただ一人、

命を助けられたのである。

その他は、女も子供も、三万八千人ごとくが殺戮された。

仲間を裏切り、ただ一人助かった男の悲しみ。そして千々石湾の名から思い出される「千々石ミゲル」の悲しみ。天正遣欧使節の一人としてローマに渡りながら、帰国後、キリスト教を捨てた男……そんなたくさんの人々の悲しみが、波の音の中に隠され、寄せては返し、寄せては返ししながら打ち寄せてきているかのように思われた。

風呂上がり、ロビーで佐藤さん夫妻と話した後、部屋へ戻る。

今日の出来事を整理しようと、役所でもらった資料（例のパンフレット）を見ると、どうしても小さな記事に目が行ってしまう。加津佐町民図書館の記事だ。

先に天正遣欧使節のことを少し話したが、その使節がバチカンから持ち帰ったものの中に、グーテンベルグ印刷機と鉛の活字一式が存在した。その印刷機が復元されて加津佐町民図書館にあるという。

この記事が頭から離れなくなった。佐藤さんに、今日行ってきた加津佐へまた戻ってくれと頼まなければならない。行っても開館していなければ、また行っても、常時、

見ることができるとはかぎらない……しかも唐突に、なぜか「天草へ行かなければ」、そんな思いまでが出てくる。

明日の予定は、口之津から島原半島を北上、南有馬、北有馬、原城跡を経て島原へ出、諫早を抜けて長崎大村空港へ向かう。やはり何も言わず予定通り動くべきだろうか。いろんな思いがグルグルと回る。役場へ電話しよう、いや図書館へ電話してみよう、そう思いロビーへおりてみるが、こんな時間にどこも開いているわけがない。結論は、明日、役場へ電話し、記事の内容を確認してからにしよう。自分にそう言い聞かせ、部屋へ戻り寝床を敷いた。

……………

プチプチプチプチ……そんな音に目が覚めた。それとも目が覚めて、この音に気付いたのだろうか。

部屋のどこかすみのほうから、プチプチプチプチという音が小さいながらもハッキリと途切れることなく続いている。豆電球の灯りで腕時計を見る。午前二時……。どこから音が出ているのか、部屋中、探し回る。

最初は空調の音かと思ったが、どこにも音源が見つからない。でも、部屋の中から、小さくてもハッキリとその音は響いてくる。ずっと大きく波の音は響いているとい

うのに、波の音より、その小さな音が部屋を支配しているかのようだ。

目が冴えてくるに従い、部屋の異様な空気に気が付き始めた。空気が違う。空気ではなく、部屋中に恐怖がみなぎっており、気を許せば、体の中へその恐怖が忍び込んでくるかのようだ。

探すのをあきらめ、布団の上に座り直すと、自分の中の苦しい思いに語りかけようとする。次第に気分が落ち着いてくる。……と思うと、まるで体に隙間があつて、そこから恐怖が忍び込んでくるかのように、あつという間にまたまた体中に広がっていく。

ここに集まった苦しい思いを受け入れるんだ。受け入れるんだ、受け入れるんだ……ああ、まだだ、怖い、怖い、たまらない。

そうだ、佐藤さんを起こそう、いやダメだ、自分でやらなきゃ、自分の課題だ。受け入れるんだ……。そんな繰り返しが続き、どれぐらい続いたのか、いつの間にか眠りに落ちてしまった。少しウトウトした感じで、次に目が開いたのは明け方の五時過ぎ……。空気が変わっていた。あの何とも言えない空気が、すっかり朝のさわやかな空気と入れ替わっていた。

六時前、着替えを済ませ、表へ出る。佐藤さんとの朝食の約束は八時。二時間ある。



南蛮船来航波止場跡（南高来郡口之津町）

私はこの時間を利用し、かつての波止場跡を目指す。この口之津の港は、長崎に先立ってポルトガル船が南蛮文化を運んだ地だ。しかし、現在の波止場は江戸時代末期に埋め立てられたもので、ポルトガル船が到着した港は更に奥へ入ったところ……。

朝、散歩をする老人に道を訊ねながら、歩くこと十分、口之津の小さな公園にやってきた。途中から、三々五々、その公園に集まってくる子供たちと一緒に……。何

のことはない、ラジオ体操に集まってくる子供たちなのだ。そして、その子供たちに導かれるようにしてやってきたこの公園が、南蛮船来港波止場跡だったのである。

ラジオ体操している子供たちをバックに、記念碑の写真を撮る。

子供たちと一緒に来て

いた父兄の方たちに、山田右衛門作の屋敷跡を知らないか訊ねてみる。でも、知る人は誰もいない。ただ目印になる東大家の駅というのは、道が違うから、一旦、国道へ戻ってからでないと行けないということだった。

まだ車の数も少ない国道を歩き続ける。

四十分あまりも歩いただろうか。やっと東大家の駅に着いた。

駅は無人駅で、その駅のすぐ先に小さな踏切があり、その踏切脇に、山田右衛門作の慰霊碑があった。その背後には「山田右衛門作屋敷跡」の碑が立てられてある。

彼はどんな思いで幕府軍に内通したのだろう。それより何より、どんな負い目を抱えて、その後の人生を送ったのだろうか。

この口之津まで来て、どうしても彼の縁りの場所へ来てみたかった。

トマス荒木、千々石ミゲル、後藤了順、そして山田右衛門作……たくさん日本人がイエスの教えに出会い、そしてイエスの教えを捨てた。恐怖から、懷疑心から、また利によつて洗礼を受け、利によつて教えを捨てた人たち。苦しい思いだけが残った。殉教した者も、教えを捨てた人たちも、ただ苦しい思いだけが残った。私は何をしにこの地を訪れたのだろう。私には、その苦しい思いに心を向けることしかできない。苦しい思いが残された地をたどることしかできない。



山田右衛門作屋敷跡（南島原市）

東大家の駅から、口之津まで、一駅だけだが電車に乗る。
七時四十五分、宿舎へ帰り着く。佐藤さんの部屋に電話すると、まだ寝ておられた。
佐藤さんを起こして、二人で波の音を聞きながら露天風呂につかる。その後、ロビー
で役場に電話し、復元印刷機の確認をする。

今日、見ることができ
るという。佐藤さんに打
診してみると、予定変更
を快く了解してくださ
る。申し訳ないかぎりだ。
本当に佐藤さん、申し訳
ありません。

四、加津佐町民図書館

「ここにグーテンベルグ印刷機があると聞いてきたんですが……」

図書館に入るなり、司書の女性に勢い込んで訊ねる。

その女性の視線をたどると、なんのことはないロビーにでんと据えられてあり、すでに佐藤さんが眺めている。すぐにでも印刷機を見にいきたいのだが、司書の方がいるいろと説明してくれる。それによると、この復元機は簡易復元されたもので、精密に復元されたものが天草にあるという。復元したもの、この加津佐ではなく、天草の教育委員会がドイツから図面を取り寄せて復元したのだという。

写真を撮る許可を得て、さあ現物を見ようとしたとき、その女性が奥から、当時の版を使つてこの印刷機でデモ用に印刷した一枚の紙片を持つて現われた。B4大の紙の中央に「サントスのご作業」の表紙が印刷されてある。その紙片をくれるという。手を出して受け取ったとたん、心の奥底から「オオーオオーツ」と、どうしようもない嗚咽が湧き上がってきた。あふれてくる声をあわてて飲み込むと、今度は涙があふれてくる。あわてて後ろを向き、少し離れたところに行つて涙を拭く。



加津佐町民図書館に置かれたグーテンベルグ印刷機（簡易復元）

深呼吸をして気分を落ち着け、また、女性司書の話に耳を傾けた。

彼女はただならぬものを感じたのか、ぜひ天草に行くようにと勧めてくれ、案内の地図を用意してくれた。天草へ行きたいと思ったのはこれだったのかと、一人で納得する（すでに宿舎にいる頃から、佐藤さんには「天草へ行きたい」と無理を言い、予定変更を了解してもらっていた）。

そんなこんなで、やっと印刷機に近づくことができる運びとなった。図書館に足を入れてから、すでに三十分以上が過ぎていた。

ところで、一九五〇年、グーテンベ

ルグ印刷機は、天正遣欧使節の帰還とともにバチカン（正確にはリスボンで購入したものである）から日本にもたらされた。その印刷機が最初に設置されたのが、この加津佐のコレジオである。

加津佐にあること二年、「サントスの御作業の内抜き書卷第一」が、「どちらなきりしたん」が、「加津佐物語」が印刷された。

そして天草にコレジオが移動すると共に、印刷機も移り、「ドチリナ・キリシタン」「ヒデスの導師」「平家物語」「伊曾保（イソップ）物語」「金句集」「ラテン文典」「ラテン・ポルトガル・日本語対訳辞典」などがローマ字で印刷され発行された。

その後、印刷機はコレジオの移動と共に長崎へ移り、禁教令の中で破却されることとなる。長崎でこの印刷機の設置されていたのは、当初は「トードス・オス・サントス教会」（現・唐土山春徳寺）であり、その後「岬の聖母教会」（現・長崎県庁辺り）へと移るわけだが、これ以外に長崎の島原町にある「後藤宗因印刷所」にも設置され、コリヤドの「懺悔録」や、わが国初の二色刷り印刷「サカラメンタ提要」が出版されることとなる。

この間、トマス荒木は、この加津佐や天草でグーテンベルグ印刷機と出会ったのだろうか。そしてこの印刷・出版への興味が、聖書の日本語訳へとふくらんでいっ



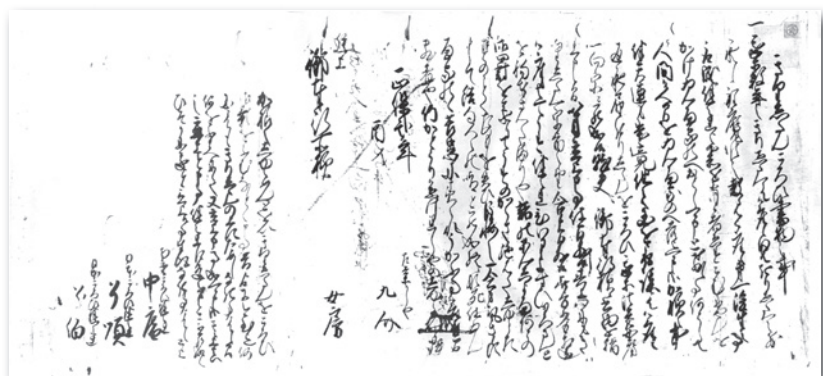
天草版「平家物語」

たのではないだろうか。彼がローマへ渡った背景には、聖書の日本語版を期待する多くの顔があったように思えてならない。

印刷が普及したとはいえ、聖書を外国語に訳すことには、まだまだ大きな抵抗があった。ヨーロッパでは、つい昨日まで、聖書を口語訳したことで異端とされるような時代であった。日本のイエズス会がこの企てに「ウン」と言うはずがなかった。イエズス会の中では、日本人の教育が重要視された一方、「日本人にはキリスト教の奥義を伝えるべきではない。たちまち自分のものとしてその姿を変えられてしまう

であろう」「日本人はイルマンとして教会の雑用に使うぐらいが適当である」……そんな偏見が大きな勢力を持っていた時代でもあった。

トマス荒木がローマに渡った目的の中には、ただ単にパードレになるため



きりしたん転び書物の事（最後の署名「了伯」とあるのがトマス荒木）

ばかりではなく、聖書翻訳の原典となるテキストを持ち帰ることが暗に潜んでいたのではないだろうか。彼はローマで危険視され、ベラルミーノ枢機卿の監視下に置かれた。厚遇されたのではなく、暗に監視されていたにすぎない。トマス背教の伏線は、このローマにあるように思えてならないのだが……。

背教してからの彼の周囲には、出版のにおいが立ちこめている。

背教後、トマスが家光に謁見し、江戸から長崎への帰途、道中を共にしたのが、同じ背教者であり、先に掲げた「天草版・平家物語」を著した不干斎フアビアンであったし、さらに「キリシタン転び証文」にトマスと共に名を連ねる「日本転び伴天連 了順」とは、先に掲げた後藤宗因印刷所の息子、後藤了順ではないだろうか。

そして共にクリストバーノ・フェレイラの著とされる「顕偽録」（クリスト教を攻撃する目的で書かれた書）製作に深く関わっていたと思われて仕方がない。歴史的には「顕偽録」は、元ポルトガル人宣教師クリストバーノ・フェレイラが著したことになっているが、現実には、了伯（トマス荒木）と了順が書いたものを、フェレイラこと沢野忠庵の名で出版したものだという思いが伝わってくるのだが……。

さらには角倉素庵や本阿弥光悦の「嵯峨本」にも、キリシタン版の影響が強く見られると言われており、その角倉素庵は京都の朱印船貿易家であり、トマス荒木の背教後の面倒を見る、長崎代官であり朱印船貿易家である末次平蔵とつながっている。

と言つても、何も資料や文献に証拠が残されているわけではない。この旅をしてみて、「そう感じた」、しかも「強く感じた」という以外にはないのだが……。
とりあえず今は、天草への道を急ぐことにしよう。

五、口之津から天草へ……

口之津港から天草までフェリーに乗る。

約四百年前、この口之津の港から加津佐コレジオの印刷機やパードレたち、そして生徒たち学生たちを載せた船が、天草の河内浦へと向かった。秀吉の迫害を逃れ、セミナリオ、コレジオを移転させるためである。

旅の成り行きというのだろうか、私たちも、何かに動かされるように、その足跡を追う。ただし私たちの場合、河内浦まで船で行くことはできない。口之津とは対岸の鬼池までフェリーで渡り、そこから陸路、河内浦（現河浦町）へと車を走らせることになる。

佐藤さんの運転でフェリーに車が入り、私たちは船のデッキに上がる。

やがて待つほどもなく出航……口之津の港が次第に遠ざかっていく。そして、港の背後に愛宕山がそびえ、右手のほうには北条岳、その向こうには雲仙岳がうつすらと見える。あの愛宕山のもとに加津佐のコレジオがあった。四百年前、天草に向かう学生や生徒たちも、この同じ景色をながめたことであろう。遠ざかる口之津



天草コレジオ跡公園

の風景を眺めていると、あの加津佐町民図書館で感じた感覚が衝き上げてくる。手すりにもたれ景色を眺めている風情を装い、声をこらえて思いっきり泣いた。

どれぐらいの時間、そうしていたのだろう。ふと後ろを見やると、佐藤さんの奥さんも、甲板のベンチに座ったまま涙を流しておられた。

やがて「間もなく、鬼池港に着岸します」と、アナウンスが流れた。

鬼池から約一時間半、目的地である天草コレジオ館に到着する。来意を告げると、まず天正遣欧使節のビデオを見せられた。やがて完全なグーテンベルグ印刷機と対面する。その印刷機を中心に、当時、コレジオで使われていた楽器類が展示され、遣欧使節がローマ教皇グレゴリオ十三世から送られたという服装や、南蛮人の服装が復元展示されている。

やがて館長が帰ってきた。昼休みを利用して、健康のため毎日歩いているのだという。館長に展示



完全復元されたグーテンベルグ印刷機（天草コレジオ館）

品の撮影をお願いするが、どうしても許可してもらえなかった。代わりにと、天草学林の資料や研究書を頂くことになった。そのうえ、ある人物を紹介された。

松崎喜一さんという洋服屋さんだ。天草には、天正遣欧使節が持ち帰ったという楽譜が残されているが、彼とそのグループは、当時の楽器を復元し、その楽譜から当時の音楽をよみがえらせていたのだ。

でも、会っている時間はなかった。お名前と電話番号を教えてもらい、神奈川へ帰ってから連絡することにする。時間が刻々と迫っている。今日の夜七時には、長崎空港へ着かねばならな



天草コレジオ跡付近

い。帰途、天草のコレジオ跡とされる河浦中学校に立ち寄り、コレジオのあった周りの山や川を見、空気を吸う。

後は一路、長崎空港を目指すばかり……鬼池から口之津へ、口之津から有馬、有家、島原と走る。原城跡にも立ち寄らず、島原城にも寄ることはなかった。行くべきところに行かされ、見るべきものだけ見せられたという気がする。夕方の島原市内の渋滞を走り抜け、諫早、大村と、ただただ走りに走り、夜七時過ぎ、飛行機に何とか間に合う時間に長崎空港にすべりこんだ。お礼の挨拶もそこそこに搭乗カウンターへと走る。

佐藤さん、中村さん、本当にありがとうございました。

六、シクストウスの聖書

最後に天正遣欧使節以後のローマに目を向けてみよう。

天正遣欧使節を謁見して間もなく、グレゴリオ十三世が亡くなった。コンクラベ（教皇選出のための枢機卿会議）が開かれ、今にも後を追うような老枢機卿モンタルトが教皇に選出された。今まで腰の曲がった老人が、教皇に選ばれるや、急に背筋を伸ばし、松葉杖を放り投げるや叫んだ。「さあ、これでわしが皇帝だ」と……。

「聖なるつむじ風」とあだ名された、シクストウス五世の誕生である。

天正遣欧使節は、この教皇にも謁見し、日本布教への援助を約束され、ローマを離れることとなった。使節の少年たちは、二人の法皇に謁見できた幸せを語っているが、果たしてそうであろうか。少なくともシクストウス五世の存在は、この後、ローマを訪れた日本人トマス荒木にとっては、彼の夢や希望を打ち砕く大きな布石となった。

シクストウス五世は、五年間という在位期間に、サンピエトロ大寺院のドーム

建設に奔走し、数百人もの人足を使い、オベリスクを一インチずつ動かし、現在のようなサンピエトロ広場の中央に移動させ、さらにバチカン図書館を建てるなど、五十年分の仕事をしたと言われる。

その中で、最大にして最悪の仕事が、ブルガータ聖書、つまり教会が抛り所とするラテン語版聖書の改訂作業であった。

四世紀、ヒエロニムスの労作とされるブルガータ聖書は、時代が下るにつれ、写字生の写し違い、読み違いが増え、印刷機が登場すればしたで、印刷すること、版を重ねることに誤字誤植が多くなってきた。宗教改革が始まるや、プロテスタントは自らの改訂版聖書を持つようになり、カトリックにとっても、信頼に値するブルガータ聖書を持つことが至上命令となっていたのである。

これをたった一人で行おうとしたのが、このシクストウス五世であった。在位三年目、学者たちが提出した決定稿が気に入らず、シクストウス五世は三百語からなる勅書を発し、学者たちを退け「教会が抛り所とすべき聖書に関する問題を決定するにふさわしい唯一の人間は、教皇、すなわち私である」と宣言したのである。

シクストウスはこの仕事をわずか八ヶ月で仕上げた。ただし今までより誤植が多くなり、しかも気紛れな翻訳、勝手な解釈をほどこし、「詩編のタイトルを変更した」



シクストゥス5世

ばかりか、聖書の章と句の配列において「おそらく不注意から、すべての章句を落としてしまった」のである。

シクストゥスは誤植の訂正に更に六ヶ月を要し、この聖書の改訂作業は一段落を見た。シクストゥス五世の大勅書は言う。

充溢せる使徒の力により、ここに宣告し、宣言する。この版は……主からわれわれに与えられた權威によって認可されたものであり、したがって真実かつ合法的なるものとして受け入れられねばならず、公共的ならびに私的な論争、説教、解釈において、疑問の余地なく拠り所とされねばならない。

聖書完成後、間もなくして、シクストゥス五世は世を去った。すべての教会に残されたのは、教皇という絶大な権力に破門処置というおまけつきのやつかいな聖書だった。そしてこの聖書は間違えだらけの判じ物になっており、アカデミック界は大混乱に陥ったという。



ロベルト・ベラルミーノ枢機卿

この後始末を引き受けたのが、ベラルミーノ枢機卿である。彼はただちに改訂版の準備と、人知れずシクストゥス版の回収作業を急いだ。プロテスタントの手に渡れば、「教皇は己の都合で、聖書まで書き換える」という非難は目に見えていたから……。

ベラルミーノが何よりも念頭に置いたのは、歴代教皇が前任教皇の教令を非難する姿は見せてはならないということだ。教皇の威信をひどく損なうことになってしまふからであり、とはいっても聖書に対する尊敬は義務である。そして教皇制と同様、聖書は誤ちを犯すことはない。この矛盾を和解させるため、採み消しが行われた。各地の異端審問所が動き、すでに出回ってしまった聖書の回収に当たった。

こうしてシクストゥス版聖書の一件も、なんとか収まりを見せたころ、一人の日本人がローマへ留学してきたのである。密かに日本語翻訳のテキストとなる聖書を求めて。

また、バチカンにおいて最も重要な聖省が完備しつつあった。世界の異端審問所の頂点に当たり、法皇が総裁となる検

邪聖省がそれである。

さて彼は、そのバチカンで一体何を見たのだろうか。

史書は、トマス荒木のローマでの動静について、ただ一つのことだけを伝えてくれる。

「枢機卿ロベルト・ベラルミーノは荒木をことのほか愛し、毎日の聖務日課まで一緒に唱えた」と……。

はたして、この厚遇は愛されたからだろうか。それとも監視されていたに過ぎないのか。ローマで厚遇されたにも関わらず、トマス荒木がマカオへ帰ってきたとき、その地のイエズス会は、彼のことを性格に歪みのある危険な人物のように伝えている。

そして、禁教下の日本に帰り、トマス荒木は捕えられ背教した。

何があつたかは想像の範疇を出ない。しかし、彼の描いた夢やその挫折を理解することから、彼を受け入れる道が開けているように思える。

いつかトマスと共に大きな声で言えるだろう。

「聖書に本当のことは書かれていない」「私たちの心の中に真実がある」と……。

第二章 ローマへ

一、香港到着

1997年5月29日（木）

トマス荒木の足取りを追ってみたくて、この旅を計画した。何年にもわたってあたためてきた思いだ。ローマへ行き、バチカン歩き、カステル・サンタンジェロ、イエズス会本部、コレジオ・ロマーノ、そしてアンドレア修道院……と、この目で見、この足で歩き、この身体で感じたい。心に響いてくるものを確認したい。

トマスが感じたものを、少しでもこの心で感じられたらと思う。

今、香港に向かう飛行機の中にいる。返還前の香港でローマ行きの便に乗り継ぎ、帰路はまた香港経由でマカオへ足をのぼす予定だ。近世、日本から西回りでヨーロッパを目指す場合、行きも帰りも、必ずマカオがその拠点となった。トマス荒木も、このマカオにとどまりリスボンに向かう船便を待ったし、帰路は帰路で、このマカ

才で不安に震えながら日本潜入の機会をうかがった。すでに日本ではキリシタンの迫害が開始されていたのだから……。

思えば、トマスとの付き合いもずいぶん長いものになった。末娘の愛子との付き合いよりも長い。自分で意識せず関わっていた頃から数えれば、もう二十年以上の付き合いになるだろうか。ほぼ長女の奈津子の歳と同じ年数を彼と関わり合ってきたことになる。

学生結婚した頃の私は、江戸時代初頭の海外交流史に夢中だった。新婚旅行の行き先からして、妻を口説き長崎・平戸へ行くという有様であり、奈津子が生まれた頃は、卒論の取材と言っては足繁く長崎へと通っていた。その頃は、朱印船貿易家末次平蔵の足取りを追いながら、知らず知らずトマス荒木の足取りを追いかけていたように思う。

たとえば滋賀の安土セミナリオ跡、京都の南蛮寺跡、大坂天満の細川越中守屋敷跡、大村鈴田のキリシタン牢跡、長崎西勝寺、平戸松浦屋敷……今にして思えば、どれもトマス荒木とゆかりの深い場所ばかりだ。それと知らず、「日本転びバレンス伯（トマス荒木の背教後の名）」の署名の入った転び証文さえ写真に撮っていた。

卒業論文を書いているとき、そして郷土史研究賞に応募するための原稿を書いて

いるとき、いつもトマスが耳元で語りかけていた。叫び続けていた。ひもとく資料の隙間から必死になって訴えていた。でも、その都度、無視した。

「いやな奴だ、こんな人間にだけはなりたくない……」

それが、ここ七、八年、彼の名をしばしば耳にするようになった。営業で入った書店で見つけた本の中に、また編集用の資料として借り出した図書館の本の中に……。これがNHKの大河ドラマで取り上げられたりとか、今、話題になっている人物ならわかる。ところが「トマス荒木」となると、あまりにもマイナーな人物だ。日本中の本屋をかけずり回って探しても、彼のことを書いた本など、そうそう見つかるものではない。それがまるで資料が追いかけてくるように、目の前に突きつけられてくる。

こうなってくると、もう腹を決めるしかなさそうだ。同じ逃げられないなら、本気になって彼のことを調べていくと、なんのことはない、先ほども言ったように、今まで自分が取材だと歩き回ってきたところは、全部が全部と言つていいほど、トマス荒木のゆかりの土地であつた。

以来、今度は私がトマス荒木を追いかけた。した。



現地時間 21 時 26 分、香港到着。窓越しに香港の夜景を見る。

秋月へ行った。島原へ行った。天草へ行った。そこで「平家物語」や「ドチリナ・キリシタン」等、キリシタン版と言われた数々の印刷物と出会った。初期の活版印刷術やグーテンベルク印刷機と出会った。そうしたら、あの時代、トマス荒木の描いた夢がおぼろげながら浮かび上がってきた。キリスト教に託した様々な思いが伝わってきた。加津佐のコレジオで、天草のコレジオで、熱っぽく語り合った当時の若者たちの夢が自分の中でよみがえってきた。

その夢に火をつけた人たちの思い、その発火点となったローマ教皇シクストゥス五世の思い……完全なラテン語聖書の完備と、それが日本でも流布されていくことへの夢。教皇が天正遣欧使節の少年たちに抱いた夢が、日本でキリシタン版の印刷に関わった人たちへと伝わっていく。その夢の担い手としてローマへ渡ったトマス荒木……。

私は今、その夢が挫折したローマへ行こうとしている。

二、少年達の旅

トマスの旅は、セミナリオの移動と共に始まった。

戦国の動乱を縫うように、セミナリオは京都、高槻、大坂と転々と畿内を移動し、最後には九州有馬のセミナリオ、コレジオと合流し、やがて加津佐へと移動していく。ところで、トマスの旅を追いかける前に、もう一つの旅を見ておこう。

信長が本能寺の変に倒れる前、天正遣欧使節の一行がローマを目指して旅立っていった。使節一行は、表向きは、九州の三大名、大村、大友、有馬氏のプリンスとなっているが、それぞれ血筋こそつながってはいるものの、ほとんど戦災孤児と言っているような子供たちであった。

それを巡察師バリニャーノが、日本布教区の発展をローマに印象づけるため、まるで日本を代表するかのような使節に仕立て上げてしまった。

しかし信長はこの企画を歓迎し、これを全面的に支援した。日本の甲冑や、信長が狩野永徳に描かせた「洛中洛外図屏風」「安土城下図屏風」がローマへの土産とし

てバリニャーノに下賜され、日本の文化を、そして自分の名をヨーロッパへ伝えようとしたのである。

三年の年月をかけ、一五八五年三月、使節の一行はローマへ到着した。マカオからマラッカ、ゴアを経由、そして喜望峰を回り、リスボンに上陸したのは一五八四年八月のことである。

ところで、これより三十三年前の三月十日、このリスボンの港に一六〇名あまりの孤児たちが集まった。ペドロ・ドメネク神父の孤児院から集まった子供たちだ。彼らは孤児院からインドへと送られる仲間の少年たち九名を見送るため、この港へと集まったのだ。九人の少年たちは三人ずつ三隻の艦隊に分乗し、東洋での布教に従事するため、現地でイエズス会の教育を受けることになっていたが、この九名の中に、ギリエルモ・ペレイラ少年がいた。

彼はインドのゴアで短期の教育を受けた後、日本布教区へ派遣され、一六〇三年に死亡するまで四十五年間、日本の各地を巡回し、ついにリスボンに帰ることはなかった。彼は日本語がよくでき、まるで日本人のように話したと言われる。そのペレイラが、晩年、九州で関わり合ったのがトマス荒木だった。ペレイラは自分と同じ境遇のトマスをまるで実の弟のようにかわいがり、まだ見ぬローマへの思いを彼



天正遣欧使節の少年たち

に託した。

しかし、これはまだ後の話である。今はまだ、トマスに先立ってローマを訪れた天正遣欧使節の少年たちと、一人のローマ教皇との関わりについて話さなければならぬ。そのローマ教皇とは、「聖なるつむじ風」とあだ名されたシクストウス（シスト）五世のことである。

使節一行がローマに到着したとき、ローマ教皇はまだグレゴリウス十三世であった。日本人にはグレゴリオ暦を制定した人として知られているが、この教皇は日本人らの使節をことのほか喜んだ。一行がローマに到着したのが、三月二十二日の夜、その翌日には早くもグレゴリウス十三世に謁見を果たしている。その謁見から二十日も経たないうちに、教皇は極東での初穂に満足しながら息を引き取った。四月十日のこ

とである。

悲しみもそこそこに、あわただしくコンクラーベ（教皇選出会議）が開かれる。集まった枢機卿たちは、新教皇を選出するまで、この会議場という密室に閉じこめられる。やがて新教皇が選出されるや、煙突から白い煙が立ち上り、サン・ピエトロ広場に集まった人たちにそのことが知らされる。コンクラーベの期間、外界から閉ざされていた会議場の扉が開かれ、次々とコンクラーベに集まった枢機卿たちが退出していく。やがて広場に面した大きな窓がいつばいに開かれ、前任枢機卿が現れるや新教皇の名を発表した。

「フエリーチェ・ペレッティ・ダ・モンタルト……！」

どよめきが起った。

そのどよめきには、「意外な」という驚きと、「なるほど」という納得の響きが入り交じっていた。フランシスコ会枢機卿モンタルトと言えば、棺桶に片足を突っ込んだような老人として、皆に知られていた。あるイギリス人は彼のことを「かつて暖炉に宿ったもつとも背骨の折れ曲がった慎ましい枢機卿」と評しているし、ある枢機卿は、肺病の末期症状のような咳を繰り返すモンタルトに「死ぬには早すぎますぞ」と励ましの言葉を贈っている。



シクストゥス5世、即位後の行列の模様

そんなモンタルトの教皇選出は、彼が間もなく死ぬであろうことを見越しての、一時しのぎであることが、誰の目にも明らかであった。

ところがである。その今にも死にそうな教皇が、五年もの間、その座にあり続け、どの教皇よりも精力的な活躍をした。サン・ピエトロ大聖堂のドームの完成、オベリスクの移動、バチカン図書館の建設、はるか二十マイルの彼方から谷と丘を抜ける水道を建設し、ローマに給水した。そして教会が抛り所とするブルガータ聖書の改訂。まさに「聖なるつむじ風」とあだ名されるにふさわしい働きではあった。彼の伝記を書いたレティは記している。

「モンタルトは投票を勝ち取るとすぐ、背筋をしゃんと伸ばし、松葉杖を放り投げ、叫んだ。『さあ、これでわしは皇帝だ』そして雷のような声を張り上げて『テ・デウム』をがなり立てたという。」

モンタルトを知る誰もが思った。

『だまされた』と……。

新教皇シクストウス五世の誕生である。

ところでシクストウスをこのように駆り立てたものは何だったのだろう。

彼がまだ若い頃、他のフランシスコ会の仲間と共にシチリアを旅していた頃のことだ。一人の男と出会った。その男とはミッシェル・ノストラダムス。「ノストラダムスの大予言」で有名な、あのノストラダムスである。ミッシェルはミカエルであるし、ノストラダムスはノートルダム、つまり聖母の意味であるから、名前を見るかぎり、どこに出しても恥ずかしくないカソリックだ。ところが実際は、彼はマラーノ、つまり隠れユダヤ教徒であった。この時も、異端審問所の呼び出しから、フランスを逃げ出している旅の途上であった。

そのノストラダムスが若いフランシスコ会士、モンタルトに接近した。ユダヤ教神秘主義「カバラ」の予言をもって……。

ノストラダムスは、モンタルトを見るなり、その場にひれ伏した。

「あなたは、将来、ローマ教皇になるべき人だ」と……。

以来、彼はこの予言にとりつかれてしまった。たとえノストラダムスがユダヤ人



ノストラダムスの胸像

であったとしても、また異端審問所から追われる異端者であったとしても、一度、ノストラダムスによって火をつけられた野心は抑えるべくもなかった。

モンタルトは、秘かにノストラダムスなる人物のことを調べだした。彼がその後、フランスへ帰り、カトリヌ・ド・メディチの信望を得たこと。彼の予言が次々と成就したこと。そんな噂を耳にするにつけ、野心はますます大きく膨らんでいく。と同時に、ノストラダムスの考え方を知るにつけ、その底に流れるユダヤ教的な神秘主義に異端のにおいを感じずにはいられない。そして、その予言を信じる自分の思いを見たとき、カソリック教徒として、自分がおぞましくもあり、後ろめたくもあった。

予言が成就し、新教皇シクストゥス五世となった今、どんなに「自分の力だ」「ノストラダムスとは関係ない」と思おうとしても、絶えず彼の影がつきまとった。彼を意識せずにおれなかった。その影を振り払うように、モンタルトは身を粉にして働いた。彼はシクストゥス五世として、カソリックの擁護者であ

り、カソリックの代表選手でなければならなかった。

さて日本から来た少年たちも、新教皇誕生の現場に立ちあうこととなり、四月二十六日には、グレゴリウス十三世に引き続き、新教皇シクストウス五世とも謁見することとなる。伊東マンショをはじめとする少年使節たちは、新旧二人の教皇に謁見できたことを喜び、自分たちが選ばれた使命の持ち主であるという自負を大きくした。

リスボンでは使節に同行した日本人口ヨラが印刷術を学びながら、日本に持ち帰る印刷機の手配に追われている。この印刷機で、キリストの教えを日本の言葉で日本に広めたい。少年たちは、その夢を教皇に語ったのだろう。

シクストウスの中にひらめくものがあつた。

「そうだ、聖書を完備しなければ。教会の唯一拠り所とする完全なウルガタ聖書を整え、世界へ布教していく礎としなければならない。」

教皇は、少年たちに日本布教の援助を約した。と同時に、四世紀のヒエロニムス以来の、「聖書改訂」という大事業に手をつけることを決意した。

こうして二人の教皇との謁見を果たした使節一行は、一五八五年六月、ローマを

出発し、一五九〇年七月二十八日、八年ぶりに日本へと帰り着いたのである。

三、サンタマリア・マジョーレ教会

1997年5月30日（金）

現地時間で早朝6時15分、ローマのフィウミチノ空港へ到着。香港からはイタリア人老夫婦と同席だった。降りるとき、荷物を降ろしてあげると、狭いシートから立ち上がり、大きな体を精一杯広げ、「サンキュー」「ブラボー」「ワンダフル」……と、知ってる限りの英語で感謝を表してくれる。

あぐくは拍手まではじめる始末で、恥ずかしさのあまり、こちらの顔がカーッと熱くなってくるのがわかる。おおあわてで逃げるようにして飛行機のタラップを降りた。

ローマへ到着してまず出会った試練が、国鉄の自動券売機だった。

空港からローマの市内へは国鉄と地下鉄を利用していくことになるが、切符を買

おうとしても自動券売機しか見つからない。そこで冷や汗を流しながら機械とにらめっこする羽目になる。誰か他の人が利用するのを見ていて要領をつかもうとするが、朝も早いせいか誰も来ない。

それでも券売機の前で五分ばかりもたたずんでいると、今まで見えていなかったものが見えてくる。ENGLISH（英語）というボタンがあるので、それを押し、後は画面の指示に従って行き先を指示し紙幣を入れると……大成功、チケットと釣り銭が小気味よい音と共に吐き出されてきた。以後、地下鉄の乗り継ぎもなんなくクリアーし、大いに自信を持ち、ローマはカプールの駅にその第一歩を印すこととなった。しかし、これからが大変だった。降り立った地下鉄カプール駅周辺は、まるで路地裏の迷路のよう。この付近に今日宿泊するHOTEL・IVANHO（ホテル・イワノ）があるはずだが、なぜか、どうしても見つからない。地図をたどって探してみても、同じ所をぐるぐる回るばかり。婦人警官に聞いても、学生に聞いても、一向に要領を得ない。そのうち、リュックが肩に食い込んでくるし、うさんくさげに見つめる人の目が気になり出す。

二時間近く探し回り、やっとこの地区の地図がわかりはじめた頃、親切な老婦人の道案内で、なんとか目的のホテルのフロントに立つことができた。片言の英語で

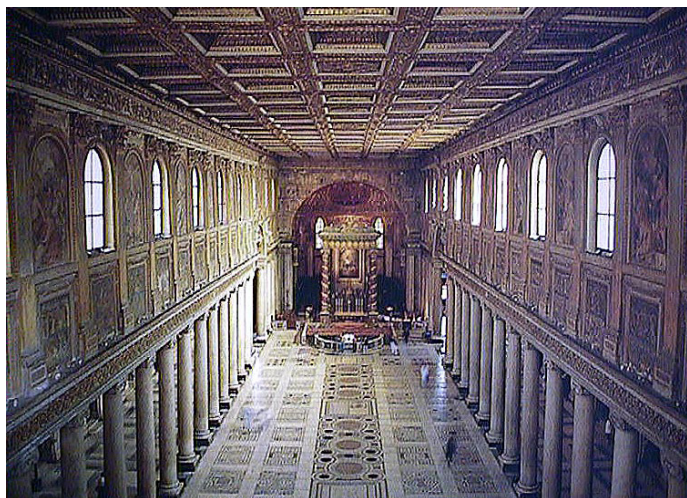


サンタマリア・マジョーレ教会

三日間の宿泊を予約し、荷物を預け、午前十時いよいよ最初の目的地サンタマリア・マジョーレ教会へと向かう。

トマス荒木のローマ滞在中の記録はほとんどないと言ってよい。それに比べ、トマスのもとローマを訪れた日本人カスイ岐部神父の記録は多い。それはトマスが裏切り者の背教者であり、岐部神父が凄絶な拷問に耐えイエスの教えに殉じた殉教者であるからだろうか。

ともあれカスイ岐部神父は、このサンタマリア・マジョーレ教会において副助祭に叙せられた。記録こそないが、トマス荒木もこの教会で副助祭もしくは司祭に叙せられたのだろう。教会の床も壁も、そしてそびえ立つ天井も、おそらくは当時のままであろう。トマスの見たものを、今、この目で見ているに違いない。しかし感動はない。



サンタマリア・マジョーレ教会の内部

懐かしいという思いもない。かといって苦しくもなく、ただ無味乾燥で、「ともかく来たなあ」ぐらいの思いしか湧いてこない。

このマジョーレ教会一つ探し出すにも、ずいぶん苦労した。見つけてしまえば、こんなわかりやすい場所はないと思うのに、見つけるまで一時間は歩き回っただろうか。

ホテルと言い、このサンタマリア・マジョーレ教会と言い、まるで私を避けているかのようだ。おまけに市内観光を予約しているバスの待ち合わせ場所までが見つかからない。半日は観光バスでローマの概略をつかんでおこうと予約したものが、マジョーレ教会の

すぐそばにあるはずが、まるで見つからない。パトロールの警官に聞いても、教えてくれないが、その場所に行ってみると違う場所だったりする。

歩き回っていて意味のない恐怖感におそわれる。闇から闇に葬られる恐怖感……いきなり拉致され、抹殺されるのでは。ありそうもない想像が頭を駆けめぐり、次第に現実感を帯び、急に周りの人間が気になり出す。道の向こうで公衆電話に向かう女性、電話が長すぎる。そして振り度こちらを見張っているのではないか。

そういえば、このローマでは私がここにいることは誰も知らない。私という人間さえ知られていない。このまま行方不明になっても、なにもなかったように誰も探さずさえないだろう。たとえ日本から家族が探しに来て、手がかり一つ残されていない。

闇から闇に葬られていく恐怖……。

やっと見つかった。何とか観光バスの出発時間に間に合ったようだ。またも一時間以上歩き回り、探し当てた場所は、サンタマリア・マジョーレ教会から歩いて五分もかからない場所であった。バスを待つ顔の中には日本人カップルの顔も見える。一安心だ。

係の人に聞けば、バスは遅れていると言う。バスを待つ間、近くのピッツェリアでコーラ片手にピザを頬張る。四分の一を注文したのだが、これがなかなかのボリューム。腹がふくれるや、あの言いようのない恐怖感もどこかへ行ってしまったようだ。

ところが、とんでもないことが起きた。やっと乗り込んだ観光バスの中に日本人が一人もいない。アメリカ人とヨーロッパ系の人たちばかり、日本語のガイドも乗り込んでいない。一安心したはずが、またもや不安の坩堝るぼの中へ真つ逆様だ。

.....

ヴェネツィア広場、フォロロマーノを経て、サンパウロ教会でバスが止まる。ガイドの人に教会の中へ導かれ説明を受ける。ローマで唯一ビザンチン様式を残した教会だそうだが、十九世紀にその三分の二が焼失し、かろうじて内陣部分の三分の一が残されているという。不得意な英語を必死で聞いていると、いきなり後ろから「日本の方ですか」と声をかけられた。懐かしい日本語に振り返ると、声の主はスペイン系の女性だった。彼女の言うには、何らかの間違いでイングリッシェコースのバスに私を乗せてしまったらしい。自分は日本語コースのガイドで、これからは私のバスに乗ってくれと言う。見れば、先ほど見かけた日本人カップルの若々しい顔も見える。ホッとしてそのカップルに声をかけてみた。



スペイン広場で（60 歳になったばかりの私。我ながら結構若い！）

聞けば、新婚旅行にこのローマに来ていたという。なぜか気が合い、観光バスを降りてからも一緒に付き合うことになった。スペイン広場へ行き、一緒に写真を撮り合う。ご主人はパナソニック映像事業部のディレクターで、奥さんは薬剤師をしているという。夫婦して写真好きがいので、三人してスペイン広場を探し回り、写真を撮りまくる。

元気のよすぎる奥さんは、ワンツースリーの気合いもろとも、欧米人の記念写真まで気安く引き受け撮りまくるという有様。ご主人もすぐ悪のりするタイプで、三人してマンホールの蓋に足を置き、足写真を撮ろうなどと



ポロロ門（入り口から双子協会が見える）

言い出す。何をするのかと思いきや、マンホールに片足ずつをのせ、上からカメラでマンホールをバックに足の集合写真を撮るというもの。カメラを構えたご主人は、並んだ足に向かって一言

「撮りますよ、いい顔をして……」

突然のジョークに、私の足も、どんな表情をすればよいのか戸惑ってしまい、幾分不安げにひきつったような笑いを浮かべていた。

楽しい一時が過ぎ、別れるときが来た。住所を交換し、それぞれの写真を送り合うことを約して別れた。二人はショッピングに。私はローマへの入り口であるポロロ門へと。



ポポロ門全景（上から2段目がメディチ家の紋章）

四、ポポロ門で

ポポロ門、正式にはフラミニア門という。北ヨーロッパからローマを訪れる人間はフラミニア街道を通り、このポポロ門からローマへ入ることになる。今ではポポロ門を一步出れば市電が走り往時の面影はないが、かつて北イタリアの田園風景の中を旅してきた旅人は、このポポロ門にたどり着き、門の向こうに広がるローマの偉容に「ローマに来た!」という感慨にひたることになる。

トマス荒木も、このポポロ門からローマへに入った。

私もポポロ広場からいったん門の外に出、トマスにならない、あらためてポポロ門から城内へと入る。教皇ピウス四世によって十六世紀に建設されたポポロ門の頂には、メディチ家の紋章が置かれ、ローマへ入る人々を見下ろしている。

その下を、ポポロ門からポポロ広場に足を踏み入れるや、やるせないような懐かしいような思いがこみ上げてくる。門を越えてすぐ左側に、サンタマリア・デル・ポポロ教会がある。教皇パスカリ二世が、一〇九九年にネロの亡霊が住み着いているというクルミの木を切り倒し、その跡に建てさせたものだ。

二重になった木製ドアを開け、中に入るや、ちょうど夕べのミサの真つ最中で、薄暗い礼拝堂の中に静かな神父の声だけが響き渡っていた。床に描かれた骸骨の絵を踏まないように避けながら、そつと一番後ろの椅子に腰を下ろす。ふと肩の力が抜ける。と同時に、またまた苦しさで懐かしさが交ぜた何とも言えない思いがこみ上げてきた。必死で平静を装う。

でもトマスは、なぜローマに来たのだろうか？
話を十六世紀末の島原へ戻そう。

一五九〇年七月、天正遣欧使節が日本に帰った。信長すでに亡く、天下人となっ



長崎西坂の 26 聖人殉教碑

た秀吉は、バテレン追放令を発し、それがただ単なる脅しではないと言わんばかりに、イエズス会、フランシスコ会を含む神父、信徒二十六名を長崎西坂で磔刑に処した。イエズス会のセミナリオ、コレジオも、そんな秀吉の目を盗むように島原半島を転々としており、伊東マンショら天正遣欧使節の帰国も、そんな秀吉の顔色を窺いながらの帰国であった。

日本の統一を目指す秀吉にとって、意のままにならぬイエズス会の勢力はまさに目の上の瘤、支配下に置くことが出来ねば追放するしかない。しかし、それを大々的に手を着けることができないのが秀吉の現状であった。追放令を発し、二十六人を西坂に誅したものの、その見返りはポルトガル商人の対日本貿易ボイコットとなって現れた。

当時、日本国内では中国産生糸の需要が爆発的に伸び、糸の値段が物価を左右し、景気の動向を支配した。国内産生糸は、この時期まだまだ量的にも質的にもその需要を賄えるほどではない。かと言って中国側は、和冠対策と称し、日本に対し海禁

令を敷き、貿易の門戸を開こうとしない。

その需要の伸びは、日本人朱印船貿易家や中国側の冒険的商人の非合法的活躍だけではどうしようもないところまで来ていた。いきおいマカオに拠点を置き、日本に中国産生糸を持ち込むポルトガルに頼らざるを得ない。そして、その貿易を実質的に牛耳っていたのが、イエズス会である。

イエズス会の幹旋がなければ、ポルトガル人商人は日本人に生糸を売ろうとしない。このため、生糸貿易から上がる莫大な利益を目指し、多くの日本人商人がキリシタンとなった。また、その経済力、軍事を頼り、戦国大名でもキリシタンとなる者があつた。長崎を支配していた土豪長崎甚左衛門もそんな一人であつた。イエズス会に長崎の地を寄進し、貿易の利を目指す多くの日本人商人を長崎に集めた。

教会を建て、堀を巡らし、港を整備し、日本の地に、貿易とキリスト教が支配する自治都市が出現した感があつた。秀吉がまず目指したのも、貿易をキリスト教から切り離すことであつた。そこで長崎を直轄地として接収し、イエズス会から取り戻した上で、バテレン追放令を発しキリシタン勢力の日本からの閉め出しをはかった。

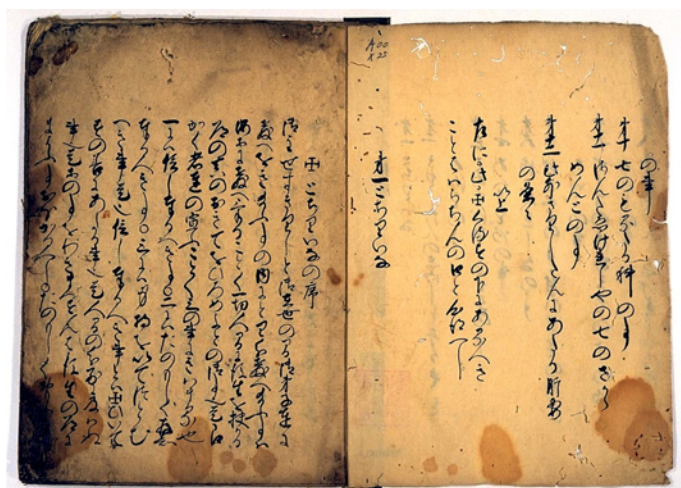
「ただし、ポルトガルの商人はこの限りではない。安心して今まで通り商売に励むように……。」

こんな秀吉の政策に、マカオのポルトガル側は、日本向けに貿易船を出さないことで対抗した。二十六聖人の殉教事件が起こるや、ポルトガル船の来航がピタリと停止した。糸価が暴騰し、日本の経済は混乱した。そんな経済制裁の前で、秀吉も方針を変更せざるを得ない。キリスト教に対しては、見て見ぬ振りをする。それが秀吉の新しい方針であった。

マカオとの貿易が再開された。再開第一号のポルトガル船に乗って、マカオで待機していた天正遣欧使節の一行が、ポルトガル国王の親書を携えて帰国した。いわば秀吉は、キリスト教抜きでポルトガル貿易は持続できないことを再確認させられたわけである。

結果、秀吉は使節の一行を伏見聚楽第で謁見し、使節の奏でる南蛮音楽に耳を傾けることとなった。ただし、一旦出したバテレン追放令を取り下げることはしなかったが……。

キリシタンに一時の平和が戻った。トマスがいる加津佐のコレジオでも、ポルトガルから持ち帰った印刷機が活動を開始した。宣教師が日本語と日本の文化を学ぶためのローマ字印刷物、「平家物語」「太平記」「伊曾保（イソップ）物語」……。日



どちりな・きりしたん（東京大学史料編纂所）

本人信徒がキリスト教を学ぶための「ドチリナ・キリシタン」「サントスの御作業の内抜書」「コンテムス・ムンヂ」……。なかでも「ドチリナ・キリシタン」は、日本で初めて、日本語の鉛活字を鑄造し印刷したものである。イエズス会宣教師たちが、日本語の複雑さ故に不可能であるとした日本語の活字化を、日本人たちが成し遂げたのである。

後藤宗因がその中心となつて開発に当たった。それに不干斎ファビアンをはじめとするコレジオの日本語教師たち、天正遣欧使節の随員として印刷術を学んだドラード、トマス荒木や宗因の息子トメイをはじめとするコレジオの修練生等々が頭を寄せあつた。ポルトガルの孤児院から日

本に送られ、四十年以上を日本の布教のために過ごしたギリエルモ・ペレイラも相談役のようにして、いつもトマスを見守っていた。また時には正式使節としてローマに渡った伊東マンシヨ、原マルチノ、中浦ジュリアン、千々石ミゲルらも顔を見せる。

加津佐の地に次第に出版を通して一つのグループが形成されつつあった。彼らは日本語の活字化を模索しながら、日本語に翻訳するためのテキストとなる原本を求めた。その第一番は、なんと言っても「聖書」である。彼らは、伊東マンシヨを通じて、ローマで完全なウルガタ聖書の改訂が行われていることを知る。シクストゥスの聖書がそれである。これを日本語に訳し、日本人の手で造った活字で出版する。夢は膨らんでいくが、イエズス会自体は、このことに対し消極的と言うより否定的でさえあった。

日本人の能力を評価し絶賛したザビエルやバリニャーノの時代は終わっていた。むしろ日本人を油断できない野蛮人とする見方がイエズス会の主流となりつつあった。日本人は宣教師とするより、同宿として教会の下働きをさせることが向いている。彼らは野心的でキリストの教えを自らの出世のために利用する。宣教師になりたがるのもそのためであり、彼らには高尚なキリストの教えを理解できない。むしろそ

の奥義を教えれば、野心的な彼らは、キリストの教えをゆがめ伝え、別の宗旨を創りだすことであろう。

これは極端な考え方であり、一方でイタリア人宣教師に見られるように日本人への好意的な態度もあるにはあるが、イエズス会日本布教区自体が日本人への厳しい風潮の中にあり、日本人会員の不満が常に存在し、ポルトガル系会員と日本人会員の間に軋轢^{あつれき}があつたことも、また事実である。

したがって彼らの夢に一役買つたのも、イエズス会ではなく裕福な日本人信徒の一人であつた。

加津佐のコレジオに、暇を見ては、はるばる長崎から孫娘を連れてやつてくる老人がいた。名を末次興善という。ザビエルの宿主となつたこともある名家で、平戸の木村氏の出であるが、その木村氏からは、日本人として初めて宣教師となつたセバスチャン木村を出している。長崎においては、商売としてキリシタンにつながる者にも、また純粹に信仰としてキリスト教を求める者にも、そのどちらにも柱石的な存在として頼りにされている老人である。貿易商として博多から長崎へ移り名を成し、今は息子平蔵に家督を譲り悠々自適の生活を送っている。

その興善に、加津佐のコレジオをつないだのが、ポルトガル人修道士ペレイラである。孤児としての自分の身の上をトマスにだぶらせ、彼を実の弟のようにかわいがっている人物だ。四十年以上を修道士として日本で過ごしながら、遂に成ることの出来なかったパードレ（司祭）への夢。ポルトガルの孤児院時代から話に聞き、夢に見ていたローマのサンタ・マリア・マジョーレ教会。

その夢を日本人孤児トマスに託した。

自ら行くには、ペレイラは老いすぎていた。まだ五十を過ぎたところだというのに、もう七十過ぎの老人のように見える。目を瞑れば、まだ見ぬサンタ・マリア・マジョーレの華やかで荘厳な礼拝堂が浮かんでくる。あの礼拝堂で、司祭に叙階される。何度も夢に描いた光景、その夢をトマスにかなえてほしい。高槻の教区で出会い、以来、長い旅を共にしながらペレイラは、ラテン語を、ポルトガル語を教えながら、その夢をトマスに語り続けた。

今、その機会がやってきた。加津佐で芽を出した出版の夢。その夢をペレイラが興善に取り次いだ。興味深げに話を聞いていた興善は、ある日、ひょっこりと孫娘を連れ、加津佐のコレジオを訪ねてきた。孫娘マリアは平戸の木村氏の出自だが、両親を亡くし、興善が息子平蔵の養女として末次家に迎えた。

以来、月に一度、興善のコレジオ通いが始まる。本を造る費用にと、来る都度、多額な金子を寄付し、新しい本が出来る度に目を細め、喜んでゐる。マリアもコレジオがすっかり馴染み、来る都度、トマスをはじめ、たくさんの修練生からかわいがられた。そうこうするうち、マリアは印刷の試し刷りの紙切れをもらつては、それを教材にローマ字やラテン語を学ぶようになっていく。

「次の本は？」「次の本は？」と、来る都度問いかける興善に、聖書を日本語で出版する夢が、自然の勢いで語られてゆく。そして出てくるのが、ローマで、教皇シクストゥス五世が自ら改訂したという「ウルガタ聖書」の存在……。

シクストゥスが日本の少年に託した夢が、ローマからはるか離れた加津佐の地でくすぶりはじめる。そして、そこにトマスをローマに行かせ、彼の地でパードレに叙階させるというペレイラの夢が重なる。

こうして末次家の援助のもと、二人の青年が留学生としてローマへ渡ることになった。その目的は、コレジオ・ロマーノで学びパードレとなること。その間、学びながら、日本に持ち帰るべきキリスト教をはじめとする文献の目録をつくり、その収集に当たること。なかでも日本語版聖書出版のため、そのテキストとなる「ウルガタ聖書」

を持ち帰ることが大きな目的とされた。

その費用は、イエズス会ではなく、末次家が負担する。派遣される修練生は、トマス荒木と、その補佐として後藤トメイが選ばれた。トマスが選ばれたのは、勿論、興善の古き良き友であるペレイラの薦めで、そのラテン語の才能を買われたがためであり、また後藤トメイが選ばれたのは、日本語活字の開発に当たる後藤宗因を父とし、日本における次世代のキリシタン出版をになう者として注目されたからである。

五、ローマでの被害妄想

トマスやペレイラの夢に心を馳せている間に、いつしか七時を回っていた。見れば、ミサはまだ続いていた。音を立てないようそと席を立ち、二重になっているドアを開けて外へ出た。

薄暗い教会の中にいたせいか、外はまだ昼のように明るく感じられた。

ポポロ広場からスペイン広場を抜け、ホテルを目指そうとするが、また、あの迷路の中にはまりこんでしまったようだ。地図とにらめっこしながら進むのだが、違

う場所へ、違う場所へと出てしまう。とうとう地図を見ることをあきらめ、自分の思うままに歩き始めた。ポポロ広場を離れてそろそろ一時間が過ぎようとしている。露店がひしめくごみごみした場所に出る。

被害妄想だろうか。みんなの目がこちらを窺っているように見える。何とかこの場所を離れなければと、気ばかりが焦り出す。広い通りへ、広い通りへと思つて進むのだが、ますます抜けられなくなってくる。狭い通りのあちこちにうさんくさげなグループがたむろしており、その前を通らなければならぬ。

全身の神経が研ぎ澄まされたようになっていてのを感じる。

「何をビクビクしている」「死んでもいいと思つてローマへ来たんだろう……」

自分に言い聞かせながら、一歩一歩進む。

ああ、やっと広い通りへ出た。

急に肩から力が抜けていく。と、一人のきつちりとした身なりの紳士が声をかけてきた。ホテルへの道を聞いているらしい。こちらもたどたどしい英語で、「今日、ローマへ着いたところで分からない」と答えると、急に自分自身のことについて語りだした。その話によると、彼はオーストラリアから仕事で来ているという。近づきの

しるしに軽く一杯飲もうとも言ふ。飲めないからと断つても、なんだかんだと言つて着いてくる。そこまで、そこまで言いながら離れようとしなない。

男が急にローマの石畳の話をはじめた。

「この石畳はローマの昔から変わらない……」

そんなことを言っているのだと思う。なるほど、いつの間にか路は石畳の坂道になつてゐる。相手の英語を聞こう聞こうと、そちらに氣を取られているうちに、石畳の狭い路地裏へと、また入り込んでしまつていたのだ。急に恐怖感がおそつてくる。相手は人氣のないところへ引っぱり込もうとしていると思つた。

そう言えば、オーストラリア人にしては妙な訛りの英語だ。こいつはイタリア人だ。「だまされた！」と思つた。

話を聞いている振りをして、隙を見ていきなり逃げ出した。いったん走り出せば、もう何が何かわからない。ただ恐怖に背中を後押しされながら、走りにつつた。

いつの間にか大通りに出ていた。

でも、安心できない。見れば地下鉄の降り口が見える。後ろを見る。誰も追いかけてこないのを確認し、一気に駆け下りる。券売機に駆け寄り切符を買おうとするがうまくいかない。焦るばかりで何度やってもダメ、あきらめかけたところに若い

女性がやってきて、私からコインを受け取り代わりにやってくれる。

その態度があまりに自然で何の抵抗も感じさせない。

なんなく切符が吐き出された。

渴き切った喉から、やっとの思いで「グラツツイエ」という言葉が出てきた。彼女は「ブレゴー（どういたしまして）」と笑顔を残して、改札口へと消えていき、張りつめた心が少しゆるんだ。

それでも地下鉄のホームへ降り立つと、またまた追われるスパイのような感覚になっていた。自分ながら針の落ちる音まで聞き分けられそうな精神状態だと思った。そんなことを考えているところを見ると、まだまだ余裕があるということだろうか……。

とにもかくにも地下鉄をB線に乗り換え、やっとかプールの駅にたどり着いた。時計は十一時近かった。地下鉄カプール駅から細い裏道をホテルへと向かう。ところがホテルの入り口は鍵がかかってしまっている。あわてて呼び鈴を押す。誰も出でない。急に後ろが気になる。

真っ暗な路地を睨みながら、「早く出てくれ」と呼び鈴を押し続ける。……やがて若い男性がいかに面倒そうに現れ、鍵を開けてくれた。

「ミスクージー」と謝った上で名前を告げると、110の番号の付いた鍵束をくれた。案内してくれるものとはかり思っていたが、男はそのまま奥へ引っ込んでしまおうとする。

「ドンデ（何処）？」と大声を出すと、面倒くさそうに外を指さす。まさか、外へ行けというのか？戸惑ったまま、そこへ立ち尽くしていると、仕方なさそうに戻ってきて説明してくれる。お互いがおぼつかない英語でやりとりした結果、宿泊棟は外の建物ようだ。鍵束は一本が建物全体のキー、一本は二階入り口のキー、最後の一本が部屋のキーのようなのだ。試してみると、果たしてその通りであった。

しかし、こんなに時間をかけてやりとりするぐらいなら案内してくれた方が早いのに……と、ついつい愚痴の思いが出てしまう。

玄関に入ると、右側にドアがある。ドアに鍵はかけられていない。開けてみると、隣の教会の礼拝堂へとつながっていた。貧乏旅行で、いよいよ金がなくなったら、教会の巡礼用施設にでも泊まろうと思っていた。出来すぎだと思った。安いと思ったら、ここは教会が経営でもしているのだろうか。それとも、ただ単に同じ建物の一角を教会として使っているだけだろうか。

音が響かないよう、そっとドアを閉め二階へと上がる。上がりきったところに鍵

のかかったドアがあった。鍵を開け中に入ると、真ん中に廊下が走り、その両脇に各部屋が並んでいる。入り口から二つ目の右側の部屋が110号室であった。部屋の入り口に布袋の像が笑っている。

不気味なその像を横目に、部屋の鍵を開ける。

部屋は狭い縦長の部屋で、入ってすぐの所にベッドがある。その奥右手にシャワー室があつて、突き当たりの所には、開ければベランダもなく外の空間に直接つながるドアがある。危険なのか、さすがにドア全体は開かず、上の窓部分だけが開くようになっていいる。開けて外を確認する。狭い猫の額のような空き地があり、その空き地を取り囲むような建物の造りになっている。

右斜め下の部分が先ほど覗いた教会の壁のようだ。見れば、小さな張り出し屋根があつて、何かあれば一階までは、あの屋根をつたつて逃げられそうだ。

そんなことを考えていると、急に入り口のドアが気になり出した。

あわてて机を動かし、ドアの前に置く。これでもしドアの鍵が破られても、入ってくるまでの時間稼ぎになるし、机を動かす音で目が覚めるだろう。今にして思えばずいぶん滑稽な話だが、その時は、本気でそんなことを考えていた。不安と訳の分らない恐怖に凝り固まつて自分でもどうしようもない状態だった。

しかし、少なくとも目が覚めるかどうかの心配は不要だった。午前二時に目が覚め、それからというもの、いくら寝ようとしても、怖いという感覚をむき出しにされたようで、遂に眠れなかったのだから。

午前四時、まだ暗い内からゴソゴソと今日一日の用意をする。

何かしていないと、おかしくなってしまうそうだったから。それに、いつでもこのイタリアから逃げ出せるよう、手帳に日航の電話番号（毎日のように日本への便が出ているのは日航だけだったから）を控えておく。さらに日本大使館の電話番号、警察の外国人用緊急電話、おまけに日本人スタッフが常駐するというJCBのローマ事務所……これだけ電話番号を控えておけば安心だろう。ホテルに置いておく荷物は、どうでもいい着替えだけにし、他は何があっても大丈夫なよう、すべて身に着けておく。

後は陽がのぼるのを待つだけだ。

六、ローマの詐欺師

1997年5月31日（土）

午前七時、ホテルを出る。まずはバチカンを目指そう。そこから第一の目的地であるカステル・サンタンジェロへ行き、異端審問所の牢獄として使われた地下牢を確認する。そして、そこに捕らわれていたブルーノが火刑に処せられるために引かれていった道をカンポ・デ・フィオーレ（処刑場）まで歩き、さらにイエズス会本部、それにコレジオ・ロマーノへと足をのばそう。

昨夜来の恐怖は、まだ頭の隅に残っているが、朝の空気に触れ、少しはゆつたりとした気分になっていた。時間はかかるが、バチカンのサンピエトロ寺院までは歩いていくことにする。

そう思っただけで歩き出したとたん、あの事件が起こった。

またもやオーストラリアから来たという旅行者に声をかけられてしまったのだ。ただし、昨日の人物ではない。今度は丸顔の、いかにも人の良さそうな人物だ。半

ズボンにウエストポーチを巻き、地図を小脇に抱えて、これではどこから見ても立派な旅行者である。

その男がサン・ピエトロ寺院への道を訊いてきた。

私は黙って地下鉄の入り口を指し示す。男は歩いて行きたいのだという。自分自身、地図を頼りに歩いていこうと思っていたところだ。そんな気持ちを感じ取ったのか、すかさず、男は小脇に抱えた地図を広げだした。

そのとき、一人の若い男が飛び出してきて「警察だ」と手帳を見せ、まずオーストラリア人だという男を調べ、今度は私の身体をチェックし、「麻薬を持っていないか」と訊いてくる。続いて私のパスポートをチェックするや、今度は所持金を見せろという。

男は財布の中味をチェックすると、他に日本円は持っていないかと言いながら財布を返してくれる。ところが持った感じが違う。財布が薄くなったような感じなのだ。あわてて中味を調べると、十万里ラあまりが少なくなっている。

「足りない」と問いつめると、男は肩をすくめ、足下を見た。札が落ちている。男は、「調べているとき落ちたのだ」と言わんばかりに作り笑いを浮かべ、札を財布に入れ返してくれた。「日本円は？」と重ねて訊いてくるので、別に隠している財布を出す。

男は中味をあらためたうえで、すぐに財布を返してくれる。

まただ、また持った感じが違う。再度、財布の中を調べると、やはり少ない。「足りない」と言いながら足下を見ると、やはり落ちている。こうなったら怪しいどころではない。こいつらはぐるだ。金をだまし取ろうとしている。

私は日本田を拾い財布に入れると、へなんとか人目につく場所へ出ようへ何か怪しげなことをすれば大声を出してやろうと身構える。男はあわてて「サンキュー」「グッバイ」と言い捨てると、その場を急いで離れていった。

「……………」

ほっと一息つくや、急に冷や汗がにじみ出し、またも訳の分からない恐怖が堰を切ったように噴き出してきた。何が何か訳もわからず逃げた。すれ違う人間がみんな敵意を持っているように感じられる。電話ボックスを見つけ飛び込む。夢中で日本大使館に電話を入れる。ここから動けそうもない。事情を話して迎えに来てもらおう。どんな事情……何者かに狙われている。物盗りを装って俺を狙っている奴がいる。そんな恐怖心が妙な実感を持つて迫ってくる。

しかし電話には誰も出ない。呼び出し音が繰り返し返されるばかり……。少し落ち着いてくると、自分のしていることがバカバカしく思えてきた。気分を落ち着かせ、

電話ボックスから出ると、回りに目を配りながら歩き出す。

やはりバチカンへは地下鉄で行こう。

ところで地下鉄の切符を買うべくリラの入った財布を取り出してみると、あれだけ調べ、取り戻したはずのリラが、ちょうど十万里ラ（一万円足らず）少なくなっていた。幸い、日本円に被害はなかったが、一体、どんな風にして抜き取ったのだろう。まるで手品としか言いようがない……。

七、サンピエトロで思ったこと

バチカン博物館の前に長い行列ができていた。

地下鉄オッタ비아ノ駅で降り、観光客らしい人の流れについてここまで来たが、この行列にはどうしても加わる気がしない。行列から離れ、サンピエトロ寺院に向かう。バチカン博物館は日を改めて行くことにしよう。

さてサン・ピエトロ広場に入ってまず目につくのが、ローマ時代、エジプトから運んでこられたオベリスク……ローマでは至るところで、このオベリスクが目につ



サン・ピエトロ広場

く。昨日だけでも、サンタ・マリア・マジョーレ教会前のオベリスク、スペイン広場のオベリスク、ポポロ広場のオベリスクなどが既に目にとまっている。

なかでもポポロ広場のオベリスクは、ラムセス二世とその息子ネルメブタの二代のファラオがヘリオポリスの太陽神殿の前に建造したものであり、ローマのアウグストゥス帝が大競技場のためローマに運び込ませたものである。

そんなオベリスクの多くを今あるような景観に移動することに力を注ぎ、懸賞を出してオベリスクの移動競争まで実施した人物がいる。「聖なるつむじ風」と呼ばれたローマ教皇シクストゥス五世である。そして建築家たちは、このエジプトから運ばれたオベリスクを一つひとつ違った手法で取り込み、魅力的な広場を造りだ



サン・ピエトロ寺院のドーム

すことに精を出した。

このサン・ピエトロ広場のオベリスクも、その時、今の場所に移されたものだという。活力にあふれたシクストゥス五世の息吹きは、都市計画推進者としてオベリスクばかりか、今のローマの町並みにもその影を残し、アクア・フェリーチ水道の放水口としてつくられた噴水にもその名をとどめ、今見上げているサン・ピエトロ寺院のドームやバチカン図書館……と、彼の業績は時を越えて現代に残され、ローマをバロックに変えた教皇として知られるに至った。

ただ一つ、ヒエロニムス以来の「聖書の改訂」という大事業は、形としてはついに現代に残されることはなかった。

彼のことを思いながら、バチカンのドームへのぼり、クーポラ内側を巡る回廊を歩いてみる。



バチカン図書館

ミケランジェロが設計し、ルネッサンスとバロックの偉大な芸術家たちのほとんどが、このドームの建設に関わった。その鑑賞に遅々として進まない観光客に続きながら、壁画を鑑賞するわけでもなく、「シクストウスの聖書」に思いを寄せている自分があった。

あの聖書を、教皇の死後、異端の書として秘かに回収し、闇から闇に葬った男がいる。……イエズス会の良心と呼ばれたベラルミーノ枢機卿だ。果たして二人の間に何があったのか、また、日本から来たトマス等はそのこととどう関わっていったのか。

トマスたちが日本を離れる少し前、シクストウス五世が崩御した。ウルガタ聖書

の完成を急ぎに急ぎ、聖書学者たちを排して、自ら陣頭指揮に立った。教会の権威である聖書を、教会のトップである教皇がつくるのは当然とばかり、自らの思いを次々と聖書に反映させていった。教会の良識と言われたベラルミーノ枢機卿さえも、これに異を唱えたことで教皇から排斥されることとなった。

誰にも意義を挟ませない独善体制のもと、ウルガタ聖書は完成した。

「この聖書に異を唱える者はカトリック教会に反する者である」。

そんな注意書きまでが付けられ、聖書は完成し、その完成を見てシクストウスは死んだ。シクストウスは自分をカトリックの代表選手、カトリックの護持者、カトリックに命を捧げた者と思っていた。いや思おうとしていた。思おうとして必死に力をふるった。ローマの町を整備し、法を整え、聖書を整え、五年間の在位期間では考えられないようなことをしてのけ、「聖なるつむじ風」と呼ばれて死んだ。

しかし、自分でも気付かぬうちにユダヤ教的な神秘主義思想がシクストウスの中に忍び込んでいた。

かつてイタリアを中心にヨーロッパ中に広まったルネッサンス文化。そのきらびやかな輝きの影で、ギリシャ思想ばかりでなく、ユダヤ教のカバラやグノーシス主義、あげくは回教的な考え方まで取り込み、現象世界の背後に隠された真なるものを探

ろうとする動きが起こった。

ユマニスト（人文主義者）と呼ばれる研究者たちの登場である。

それはギリシャ古典への回帰を看板にはいるが、「神秘主義」とか、時には「自然魔術」と呼ばれる動きを伴っている。このことは、結果として、知識を追求し自然の神秘を追求することによって、がんじがらめのキリスト教的な制約から、自分たちを解放しようとする動きへとつながっていった。

その中心となったのが、ナポリ大学であり、フィレンツェのメディチ家である。

そして、この動きに油を注いだのが、一四九二年のグラナダ陥落である。

かつてスペインの地は、キリスト教、ユダヤ教、回教が共存する多宗教共存の可能性を探る実験場のような場所となっていた。経済優先の国では、宗教的に寛容となる場合が多く、たとえばヴェネツィアがそうであるし、一昔前の南フランスのトゥールーズがそうであったが、スペインの場合は少し事情が異なる。スペインでは技術的にも経済的にも、キリスト教世界は回教世界の前にあくまでも後進国であり劣等国である。このことはスペインのみに限らず、西欧世界全体に言えることであるが、スペインの場合はイベリア半島という限られた地域に三つの文化が同時にあるため、どうしても後進国であるキリスト教世界が、回教世界の風下に立たされる。

この位置関係をレコンキスタ（失地回復運動）という旗印の下に、軍事行動によって一挙にひっくり返し、キリスト教世界がスペインの覇者になろうとしたのである。その永年の努力が、グラナダ陥落という結果となって現れた。

いまやキリスト教世界がスペインの覇者となった。スペインにおける多宗教共存は、文化的にも経済的にも優れていると自他共に認めた回教世界が見せた懐の広さであった。それが劣等感の固まりのような、カソリック世界が覇者になった。スペインを解放したと信じるイザベラ女王は、自らをキリスト教世界の代表選手と信じ、非キリスト教世界の追放に情熱を注ぐことになる。

その結果がスペインからのユダヤ教徒の追放であり、回教徒の追放である。

カソリックに改宗することを拒んだユダヤ教徒や回教徒がスペインから逃れヨーロッパへと散らばっていった。そして、彼ら優れた人材を吸収していったのがイタリアであった。

ナポリに、フィレンツェに、回教徒の高度な技術や情報、ユダヤ教徒の神秘主義的思想（カバラ）が植え付けられていった。

ルネッサンスという形を取って現れたこのような考え方は、芸術活動と相まってまたたくうちにヨーロッパ中に広まっていく。結果、キリスト教の三位一体をも力

バラ的に解釈しようとする試みが、カソリック教徒の間にさえ広まっていく。

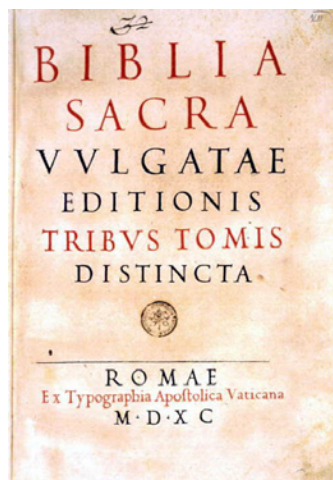
代々、ドミニコ会と共に異端審問官を出し続けてきたフランシスコ会士にさえ、カバラ的神秘主義の研究に走る者が出てきている。また、ノストラダムスのように隠れユダヤ教徒（マラーノ）として、ユダヤ人をカソリック世界の迫害から守るため、カバラの思想をキリスト教世界に積極的に忍び込ませようとする人間さえいた。その一つの形が、フランシスコ会士の一人を選び、カバラの予言によってローマ教皇とすることであった。ノストラダムスの選んだ人物、それがモンタルト、後のシクストウス五世であった。

彼のカソリック教徒としての苦悩は先に述べたとおりである。

自然魔術やカバラに関わった人間たちは、多かれ少なかれ、知識を追求することによって、頑迷なキリスト教世界からの自己の解放を目指しているところがある。それをカソリック世界が異端としないわけがない。ただシクストウスの悲劇は、彼が自らをカソリックの擁護者と信じながらも、自ら気付かぬうちに、当時の人文主義者と呼ばれた人たちの思想の影響を受けていた点にある。

それは、彼の改訂した「聖書」にさえ反映していた。

このことを指摘したのが、イエズス会のベラルミーノ枢機卿であった。彼は「教皇」



シクストゥス・クレメンティン聖書

と「聖書」の絶対的な擁護者である。「教皇」は絶対的に正しいし、「聖書」に書かれていることも、また絶対である。ベラルミーノはこれを守る立場にあった。しかし、教皇が異端であつた場合、どうなるか。「教皇」と「聖書」を否定することは、カソリックを土台から揺さぶることになる。かと言って、異端的思想を教会の拠り所とする「聖書」に残しておくことは、それ以上に危険なことになるかも知れない。

ベラルミーノは、シクストゥス五世の存命中にこのことを示唆したに違いない。だからこそ、シクストゥスは、ベラルミーノを排した。逆にベラルミーノが異端視されかねない。ベラルミーノはイギリスに避難せざるを得なくなった。

邪魔者のいなくなったローマで、教皇は思いのままの「聖書」をつくりあげ、そして死んでいった。この独裁者が死んだとき、周りの者たちすべてが、ほっと一息ついた。そして避難していたベラルミーノもローマへと帰ってきたのである。

ローマに帰ったベラルミーノが最初に手がけた仕事が、「シクストゥス聖書」の

回収であった。何があっても「教皇」が間違いを犯してはならない。各国の異端審問所に指令が出され、秘かに「シクストウス聖書」の回収が行われた。その上で、誤植が多いという口実のもと、「シクストウス聖書」の更なる改訂版が、前教皇と現教皇の共同の名のもとに急速に出版される運びとなつた。

「つむじ風」の尻拭いは、それ以上のつむじ風の中で行われた。

八、サンタンジェロ城

トマス荒木や後藤トメがローマを訪れたのは、ちょうど、そんな事件も片づき、バチカン政庁が一息ついた頃のことであった。

ローマでの彼らの目的は、一つはコレジョ・ロマーノで日本の教区司祭となるため学ぶこと、そして、もう一つの目的は、日本におけるキリスト教出版物のテキストとなるべき文献を収集し持ち帰ることであった。

特に日本語版聖書のテキストとなるべき「ウルガータ聖書」を持ち帰ることが、二人に期待されていた。そう、シクストウス五世が日本の少年たちと約束し、今は

ベラルミーンによって異端として処理された例の「シクストウス聖書」のことである。

そして、この二人の日本人の、文献収集面での相談役を買って出たのが、他ならぬベラルミーン枢機卿であった。イエズス会、いやキリスト教世界が認める最高の知性ベラルミーンが日本の青年たちに尽くす姿は、周りには異例のこととして映った。ベラルミーンは、文献収集面ばかりでなく、二人の学習についても心を配り、二人がサンタ・マリア・マジョーレ教会で司祭に叙せられたとき、もつとも喜んだのは、このベラルミーンではなかったろうか。

教皇に、ローマの市民に、そしてヨーロッパの人々に、極東でのイエズス会の働きを強く印象づけねばならない。日本での修道会間の対立、日本人とヨーロッパ人イエズス会士の対立、日本市場への新教国オランダ・イギリスの参入……様々な問題を抱えている今だからこそ、人々が感動し、心を一つにする材料が必要なのだ。少なくとも、トマス荒木と後藤トメの二人は、その役割を果たしつつある。聖書を日本語に訳して何が悪い。むしろ訳す人間を育てねばならない。「聖書」を教会に閉じこめ、教会が「聖書」を独占する時代は終わった。

ベラルミーンはそう思った。

むしろ喜ばしいことだ。日本や中国を中心に、アジアの地にキリスト教が広まっ

ていく。日本にいるヨーロッパ人イエズス会士の言うことなど些細なことだ。日本司教区は、バリニャーノ師の言ったように、日本人に任せるのが一番よいのではないだろうか……。

ロベルト・ベラルミーノは、この面で実に進歩的であつた。しかし、ある面では頑固という言葉が生ぬるく感じるほど頑なであつた。それはキリスト教の正当性の問題である。

今も一人の人間が、サンタンジェロの地下牢に閉じこめられている。キリスト教の正当性を脅かす人間、ジョルダーノ・ブルーノ……。彼は若くしてドミニコ会に学び、トマス・アキナスに傾倒しながらも、その教えにもの足りず、ユダヤ神秘主義や自然魔術にも心を向け、あらゆる知識・学問を総合し、ヨーロッパ人として初めて「宇宙の無限」を唱えるに至つた。そして、彼の取り調べに当たつたのが、カソリックを代表する知性、ベラルミーノ枢機卿であつた。

そうだ、ブルーノに会わなければならない。

サンタンジェロの地下牢に行かなければ……。

急に沸き上がってきたその思いに急ぎ立てられるように、サン・ピエトロの寺院



サン・ピエトロとサンタンジェロをつなぐ回廊

見学も早々にカステル・サンタンジェロへと向かうことにする。

今、このサン・ピエトロの屋上に立って見渡す光景の中に、サン・ピエトロから延々と続く回廊がある。その回廊の行き着く先に、目的のカステル・サンタンジェロがある。サン・ピエトロにいざ事が起こった場合、この回廊

を使って、教皇がサンタンジェロ城へと避難した。回廊はいわば教皇の逃げ道のようなものだ。サンタンジェロ……もとはハドリアヌス帝の廟として建設された。それが何度かの拡張を経て、城門には数々の火器を備え、ついには今見るような鉄壁の要塞へと変身した。

あの回廊をたどってサンタンジェロに向かおう。

はやる心をおさえ、「ローマ教皇の棺が安置されているサンピエトロの地下遺跡だけは見ておこう」と、大急ぎで見学をす



サン・ピエトロとサンタンジェロをつなぐ回廊の全体イラスト



カステル・サンタンジェロの威容

ませる。次いで回廊の出発点とおぼしき地点へと向かった。そこにはみやげ物売る小さな一角があつて、その背後に高々とそびえるサンピエトロの一角が見える。そして、そこから少し下るような形で回廊への出口らしい部分が突き出し、その先には城壁のような回廊が延々と続いている。

この回廊の先に、目指すカステル・サンタンジェロがあるはずだ。

.....

回廊をたどって十五分ばかりも歩いたろうか。突然、道が開け、巨大な石の固まりとも見えるサンタンジェロ城が姿を現した。すごい存在

感で見る者を圧倒する。まさに鉄壁の要塞という感じだ。

構造は、土台とも言える石を積み上げた巨大な固まり（日本の城で言えば石垣の部分に当たる）の上に、新たに建て増された建造物が載っている。この下部の城壁部分に地下牢があったと言う。

早速、入場券を求め、ポツカリと開いた闇の中へ身を滑り込ませていく。

石に囲まれた通路を幽かな灯りが照らし出し、辺りは異様な雰囲気満ちている。入ってくる者を締め付けるような闇と灯り。他に観光客がいなければ、とてもこの感覚に耐えられそうもない。幾度、人影が途絶え、叫び出しそうになったか知れない。仄かな灯りを照り返す土の道は、いつしか石畳へと変わり、ゆるくゆるく、回るように上へ上へと向かっていく。

やがてゆるやかな上り坂は石の階段へと変わり、踊り場を経て直角に折れ曲がる。と……、曲がり角の左手石壁の上方に、鉄格子のはまった窓のようなものがあった。それは背伸びしても届きそうにない高さのところにあつて、内部の様子を見られることを拒んでいる。さらにその先には釘付けにされた木製の扉があり、鉄製の頑丈な鍵がかけられていた。



カステル・サンタンジェロの地下入り口部分

どうやら、ここが牢獄に使われていた場所のようだ。

扉の下の際間から手を入れ、中を探ってみる。乾いた土の感触が返ってくる。

この他にも、壁や扉こそなくなっているが、それらしい横穴がいくつか見つけられた。だが、説明文らしいものはどこにもない。観光客の中で、ドイツから来たと思われる少年たちがペンライトを持っていたので、一緒にその暗闇に首を突っ込んでみる。部屋のようにだが、闇が深すぎてよくわからない。

木製の扉の前へ戻ってくる。

他に誰もいないのを確かめ、前の石段に腰を落とす。

この扉の向こうにブルーノが閉じて



カステル・サントンジェロの地下牢獄部分

められていた。トマス荒木は、ここで、こんなふうに関この木製の扉に寄りかかってブルーノの話を聞いた。なぜか、そう感じて仕方がない。根拠もないのに、その思いはいつしか確信となっていく。体中を流れる感覚……噴き上げてくる訳のわからない思い。少し氣を許せば、叫び声となつて身体からあふれ出ようとする。屈み込み、口だけ大きく開け、声にならないよう、うめき声を出している自分。

間違いない。トマスはブルーノと出会った。

この扉を挟んで、彼はブルーノの語る言葉の一言一言に耳を傾けた。

トマスはブルーノを通して、カソリッ



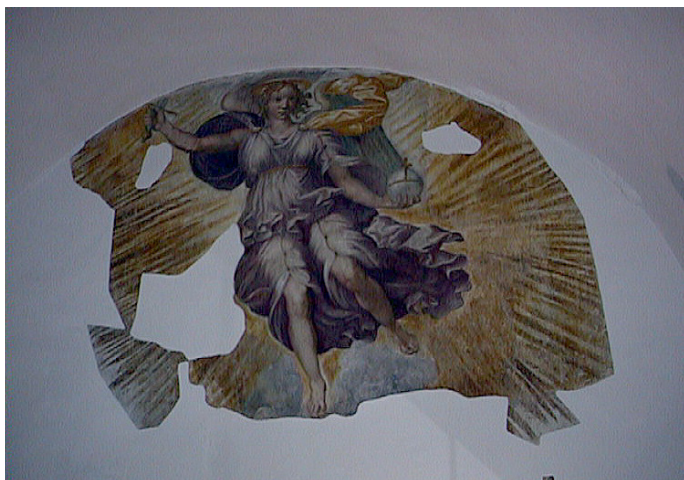
異端審問の行われた部屋

クが異端とした「神秘主義」や「自然魔術」の思想に触れていった。

そして、ブルーノが焼き殺されるのをその目で見た。

階段はまた直角に折れ曲がる。いきなり、まぶしい陽の光が射し込んでくる。出口だ。城塞の胎内を抜けきったという訳だ。今度は、その上部に建てられた建造物の部分に移っていく。

教皇たちの住まいした部屋は、今では数々の美術品や宝物の展示場と化している。そんな展示室から展示室をつなぐ通路のような部屋に出た。部屋の両脇に展示ケースを並べているため、通路のような感じを与えるが、よく見ると、正方形に近い

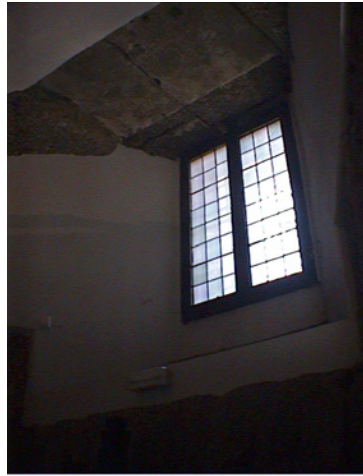


異端審問の行われた部屋にかかけられたという「裁きの天使」

部屋で、ショーケースの後ろを覗き込んでみると、時代物の大型銃や小型砲が整然と並んでいる。それだけでも結構な見ものになると思うのだが、なぜかショーケースで隠してしまい、部屋全体をわざと目立たないようにしてしまっている。部屋自体が、まるで、「自分はただの通路ですよ、早く次の部屋へ移ってください」と言っているかのような。私もあやうく通り過ぎてしまいたいそうになったが、ふと後ろを振り返ったとき、愕然とした。

「裁きの天使だ！」

背後の壁に、その周囲こそ剥がれてしまっているが、間違いなく「裁きの天使」のフレスコ画が、この部屋全体を支配している。振り返って、このフレスコを中心



異端審問の部屋に差し込む光

に部屋全体を見ると、今までの目立たなかった部屋が急にある色調を帯びてくる。

異端審問という、どんよりした色調を

……。

何の説明がなくても、ここは間違いなく異端審問が行われた部屋だ。記録には、この城の中で異端者を取り調べた部屋には、「裁きの天使」のフレスコ画が掲げられてあったという。

高い威圧的な窓。その高い狭い窓から射し込んでくる陽の光。テーブルの冷たい感触。この部屋でブルーノは取り調べを受けた。あの小柄なベラルミーノ枢機卿が、そびえ立つように大きく見えたことだろう。



サンタンジェロ橋（カンポ・デ・フィオーレへとつながっています。）

九、カンポ・デ・フィオーレ

サンタンジェロの屋上テラスはカフェテリアになっている。

ここでは、軽い食事をとったり、飲み物を飲んだりしながら、ローマの街を一望できるようになっている。左手には、テヴェ川に沿ってバチカンの最高裁判所が見え、その右手、ちょうど正面真下にはサンタンジェロ橋がテヴェの流れをまたいでおり、さらに右に向きを振ると、バチカン回廊の向こうにサンピエトロ寺院の優雅な姿が見える。

正面に向きを戻そう。

これから向かおうとしているのは、この真下、サンタンジェロ橋の向こう岸である。



露店でにぎわう橋のむこうに真っ直ぐ伸びる路……。路は途中から右手の方に入っていく狭い石畳の路に枝分かれしている。

この路地が、ブルーノが処刑場へ引かれていった路だ。そして、私がこれから歩こうとする路だ……。

狭い路地、長い年月にすり減り、無数の凹凸ができた石畳の路に雨上がりで、いくつもの小さな水たまりができています。この路を歩いていると、石畳の一つひとつがいとおしく、人さえないなければ、路に倒れ込み、その石の一つひとつに口づけしたい衝動に襲われる。

その路地を抜けたところが、カンポ・デ・フィオーレ、日本語で言う「花の広場」だ。ローマで最もにぎやかな場所……いつ行っても露店と観光客でひしめいているところだ。かつて、この広場を取り囲む宿屋の多くを、一人の女性が所有していた。ローマ教皇アレックスサンドロ六世の愛人であり高級娼婦であるヴァンノッツァ・



カンボ・デ・フィオーレに立つジョルダナーノ・ブルーノ像



カタネイ。

かつてはそんな娼館だったのだろうか。今では薄汚れてしまった、そんな建物の壁々が、それでも賑やかに露店や観光客を取り囲んでいる。

そんな賑やかさとはかけ離れて、広場の真ん中にたった一つ、青灰色の陰鬱な像が空にそびえて立っていた。この広場で火炙りとなつたジオルダーノ・ブルーノの像だ。彼は、サンタンジェロから、私が今歩いてきた路を引かれ、この広場に着いた。

そして、「魔術や占術に没頭し」「輪廻説を信じ」「マリアの処女性を信じず」「神を罵り」「聖像礼拝や法王を非難し」「カトリック教会に反する意見を抱いた」……等々、二十四項目にわたる罪状によって火炙りとされた。ブルーノがヴェネツィアで捕らえられてから、実に七年におよぶ審議の末の火刑であつた。

たまたまローマを訪れていたドイツ人学生ガスパール・シヨップが、この火刑に遭遇し、そこで見聞いた一部始終を細々と書きとめ、故郷の家族に送っている。彼の受けた衝撃は、ただ単に火炙りを目の当たりにしたというにとどまらず、むしろブルーノの死に直面しての神をも恐れぬ態度に強く打たれたかのようだ。そこで、彼の言葉によって、我々もブルーノの火刑に立ち会うことにしよう。

トマスもまた彼の死に立ち会つたように思えてならないから……。



Salomon et Protagoras
Quid est quod est?
Ipsum quod fuit
Quid est quod fuit?
Ipsum quod est.
Nihil sub sole novum.

Johann Georg
von Meibomius
et Meibomius 1568

ジョルダノ・ブルーノ肖像と自筆

広場の中ほどには、今まさに火を放たれようとする薪が堆く円形状に積まれ、その中央には、ポンペイ劇場を背にして高く立てられた一本の十字架に、痩せ細った裸の男が口に舌枷をはめられて括りつけられている。

火は放たれ、毒蛇の舌のように薪を営めまわり、やがて紅蓮の炎となって十字架を呑みつくし、邪宗徒の肉体とともに渦巻く煙を噴き上げながら広場の空へと消えていった。

(さらにガスパールは続ける)

火炙りという過酷な刑罰もこの男の精神にいささかの怯みも与えることができなかった。それどころか処刑を宣告する者に向かって、「宣告を受けている自分よりも、宣告を下している君たちの方が、真理の前にもっと恐れおののいているではないか」と公言してはばからなかった。

そして今、神の宥^{ゆる}しを乞う最後の機会を与えてやろうと、立ち合いの司祭が差し伸べた十字架に対しても、侮蔑の一瞥をくれただけで、つと顔を背け、無言の抗議を棄てようとはしなかった。肉を爛れ焦がす炎にも呻き声一つ上げなかった。まるで自らの魂が煙とともに昇天してゆくことを固く信じきったもののように、従容として死の痛みに耐えたのである。

もしトマスがこの場にいたなら、トマスはどのような思いでブルーノの死を見守ったのか。どのような経緯で、ブルーノの死と関わり合うこととなったのか……。

鉛でも飲み込まれたような重苦しい疑問だけが残った。

ともあれ、このようにしてヨーロッパで最初に宇宙の無限を唱えたユマニスト（人文主義者）ジオルダーノ・ブルーノが焼き殺された。

そして人々は、彼の死をもってルネッサンスの終わりととらえた。

十、イエズス会本部とコレジオロマーノ



マメルティーノ牢獄

カンポ・デ・フィオーレの賑わいをあとに、重苦しい気持ちを抱えたまま、イエズス会本部へと向かう。どうしてもイエズス会本部と、トマスが学んだコレジオ・ロマーノだけは、この目で見、この足で踏みしめてみたかった。

カンポ・デ・フィオーレの人混みからヴィットリオ・エマヌエーレの大通りへ出る。この大通りを東へ東へと歩くこと十分、路が東南へ別れる小路と出会うそのちょうどそのY字のところにイエズス会本部はあった。

路を右へ折れ、正面入り口へと回る。……が、鍵がかかっていて入れない。見ると、右横手に事務所風の小さくドアがある。



フォロ・ロマーノ（小さく写っているのは結婚式の一行）

入ってみるが、誰もいない。

「ボンジョールノ」と大声を上げると、奥から警備員と思われるがっしりした男性が現れた。ミスクウィージ（すみませんが……）と声をかけてはみるが、あとが続かない。参考書片手に英語混じりのあやしげなイタリア語で意志疎通をはかること約十分、やっとわかったことは、今は休憩中で夕方四時半にならないとオープンしないこと、それだけだった。

現在時刻は二時を少し回ったところ。近くに聖ペテロが捕らえられていたという地下牢（マメルティーノ牢獄）があるはずなので、これを見学に向かう。おりしも、その地下牢遺跡の上に建て



コレジオ・ロマーノ正面入り口

られた教会（サン・ジュゼッペ・デイ・ファレニャーミ教会）で結婚式があった。暗い地下牢を見終わって、初夏の日差しの中へ出てくると、ちょうど、その花嫁の写真撮影の場に出くわした。純白の花嫁衣装が抜けるような青空にまぶしい。今、感じてきた湿った冷たい地下牢の感触と、いかにもちぐはぐで、何か不思議で白昼夢のような感じさえした。

その後、フォロ・ロマーノで屋台のパンをかじり、古代遺跡を眺めながらの遅い昼食……。

一息ついて、グレゴリア大学へと向かう。何かの本で、現「グレゴリア大学」こそ、かつての「コレジオ・ロマー



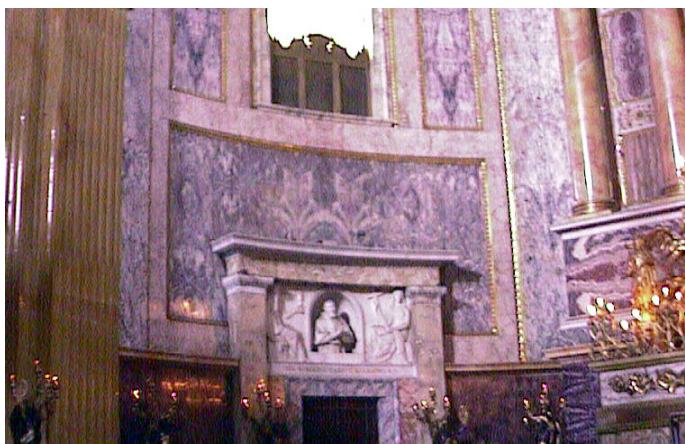
ザビエルの右腕のミイラ

「、つまりはトマスの学んだところだと聞いたからだ。その本には「コレジオ・ロマーノ（現グレゴリア大学）」と、確かに書いてあった。

ところが……である。

やっとたどり着いたグレゴリア大学、写真まで撮って、感慨に浸っていたというのに、写真を撮らせてほしいと頼んだ事務の人に「ここがコレジオ・ロマーノだったんですね」と（こんなにすんなりと訊いたわけではないが、気持ちだけはこういう気持ちで）、念押しに尋ねたところ、「ノン」という返事が返ってきた。係りの人は、私の地図を取り上げると、その太い指で地図の一点を指し示した。

確かに、その指の先に「Palazzo del Collegio Romano」とある。しかも、今訪ねてきたイエズス会本部の近くだ。とんだ笑い話だ。訊かなければ、今でもグレゴリア大学をコレジオ・ロマーノと信じ、勝手な絵を思い描いていたことだろう。とも



ロベルト・ペラルミーノの胸像が飾られてある。

かく急ごう。もう五時近くだ。

これから教会が閉まるまでの約二時間、イエズス会本部とコレジオ・ロマーノを大急ぎで見て回った。

イエズス会本部では、やたらリアルな「ペラルミーノ枢機卿の胸像」や「ザビエルの右腕のミイラ」に出会い、コレジオ・ロマーノでは、建物の中で迷ってしまい、観光客の入ってこないひっそりと静まった学校の廊下のようなどころに出ってしまった。倉庫代わりにでも使われているのだろうか、学生たちが「聖劇」の上演にでも使ったのか、結構大きな看板状のものを見つけた。高さは一メートル半ぐらい、横は二メートル半ぐらいもあるだろうか。ベニヤ板に紙を貼り、額状の縁取りの中にラテン語(?)で説明文が書かれている。



ロベルト・ベラルミーノの名前が書かれた看板

その一行目に、大きく「ROBERTVS BELLARMINO (ロベルト・ベラルミーノ)」とある。学生たちがベラルミーノ枢機卿を取り扱った芝居でも上演したのだろうか。それとも、何かの展示の時にでも出された説明文か。わからないまま、写真を撮っておく。いつかわかる人に読んでもらおうと……。

ところで、イエズス会本部で見たベラルミーノの胸像は、いかにも穏やかそうな容貌と異常な頑固さを合わせ持つ、そんな感じを持つ老人に仕上がっていた。これと非常によく似たタイプの人と、かつて一緒に仕事をしたことがある。この人の書いた本をボランティアで編集することになったのだが、初



ロベルト・ベラルミーノの胸像

め会った時の好々爺然とした印象は、仕事を進めるごとに変わってくる。

ともかく頑固の一語に尽きた。自分の思ったことは、周りにどんな影響を与えようが、どんな迷惑を与えようが、決して折れることをせず、それが正しいかどうかは二の次で、自分の言うことを認めさせるまで、執拗に攻撃を繰り返して飽くことがない。

もし形が内面を映し出すのであれば、ベラルミーノという枢機卿も、そういう類の人だったのだろうか……。そう思わせるほどに、二人の容貌はあまりにもよく似ていた。

この顔こそ、ブルーノを裁き、トマスを裁いた顔だ。

あの事件以後、トマスは、このベラルミーノの監視下に置かれた。そして、苦しい心を抱えたまま、禁教令の布かれた日本へと帰ったのである。

しかしトマスの心には、すでにキリスト教への信はなかった。

コレジオ・ロマーノを出ようとした時、不思議な絵を見つけた。それは観光客の入らない、奥まった



日本人が描かれた油絵

人目に付かない場所に飾られていた。相当年代物の油絵だ。絵の全面を、時代という埃が幕のように覆っている。破れも目立ち、そんなに大事に保管されていないことがわかる。

絵には、神父の前に跪く一人の青年の姿が描かれていた。服装こそ、西洋風の衣装だが、彼の前に日本刀が置いてある。

日本人だ！ 天正遣欧使節の少年の一人だろうか。でも、それならもっと大事に保管されていてもよさそうだし、他の少年たちの姿が描かれていないのが不思議だ。カスイ岐部神父だろうか？ それともトマス荒木だろうか？ 通りがかった神父に尋ねてみた。

日本人だということは肯定するが、それ

が誰かということになると、肩をすくめるばかりだった。

七時十五分——閉館の時間だ。

十一、再び被害妄想に

二日目の夜を迎えた。

ローマへ来てまだ二日目だというのに、もう何カ月も過ぎたような感じがする。今日は、昨夜の睡眠不足も手伝い、ホテルへ帰り着くなりすぐに寝付いてしまった。ところが真夜中に目が覚め、それからはどうしても眠ることができない。真夜中、眠れずにベッドに横たわっていると、謂れのない恐怖心がムクムクと頭をもたげてくる。またまた昨日の繰り返しだ。

ドアが気になる。ドアに施錠されているのを確認し、昨日と同じようにドアの前にベッドを動かす。それでも恐怖心はおさまらず、紛らそうと、ベッドの上に地図やノートを広げ、今日の予定を立てようとするが、どうしても手に付かない。

イタリアへ来る前、女房が話していた雑談が妙に生々しくよみがえってくる。そ

の話というのはこうだ。

イタリア観光に出た日本の若い女性グループの話。女性二人でショッピングに出たが、一人がブティックの更衣室に試着のために入った。ところがいくらたっても彼女は出てこない。実は、更衣室の床に細工がしてあったらしいが、そんなことは知らない連れの女性、いつまでも出てこないで心配になり更衣室を確認するが誰もいない。店員に訊くと、「お連れ様はもうお帰りになりました」という。

ところがホテルへ帰ってみても、彼女は戻っていない。ついに見つからないまま日本へ帰ることになった。ひょっとして日本へ先に帰ったのでは……との一縷の望みを抱いて。

日本にも彼女はいなかった。話を聞いた彼女の母親は、娘を捜しにイタリアへ飛ぶ。警察への届け出、ホテルや、消えたというブティックでの聞き込みなど、心当たりを探し回るが、空しく日が過ぎて行くだけ。一月も過ぎた頃だろうか、ふと目にした見せ物小屋の看板、両手両足のない日本人娘の見せ物。もしかやと入ってみると、すでに気は狂ってはいたが、果たして自分の娘であつたという。

外国旅行をする若い女性へのいましめか。事実のほどは明らかではないが、女房

は「本当にあつた話だ」という。その時は、「まさか！」という思いで聞いていたが、今、妙に生々しくよみがえってくる。そこに今日見てきたカステル・サンタンジェロの牢獄の様子、ブルーノの火炙りの様子がだぶり、思わず叫びだしそうになる。

ドアの向こうで誰かがこちらを窺っている気配……。
完全に被害妄想だ。

ベッドの上に座り込み丹田呼吸……。

次第に落ち着いてくる。そのまま瞑想を続ける……。

しかし、少し気を抜くとまた逆戻り、そんな繰り返しの中で、これが続いたら気が狂うと思った。もう限界だとも思った。

その時、奇妙なことが起こった。体はベッドに座って瞑想の姿勢のまま。と言っても、心は向いていない、向こうとしているのだが、恐怖心になんじがらめという状態……その時、それは起こった。

膝の上に置いた掌から、何かが出ている。目に見えないが、両の掌から何か「気」のようなものが溢れるように流れ出ている。それが体全体を覆うように包んでいく。目にこそ見えないが、見える以上にはつきりと感じる。こんなことは初めてだ。

何てことだ。自分はパワーなど関係ないと思っていたが、恐怖心のあまり無意識

とはいえ、自分から「氣」が流れ出している。心が落ち着くどころか、パワーを使っているんだ。落ち着いてから、そう思った。もうイタリアを離れよう、日本へ帰ろうとも思った。

そして、荷物をまとめ始める。

荷物を整理しながら、「いや、もう少し踏みとどまろう、今、空港へ行っても、日本へ帰れるかどうか……」と、そう思い直した。でもローマにはいたくないと思った。やはり、もう我慢できない、ローマにだけはいたくない——と思った。

「フィレンツェ、そうだ、フィレンツェへ行こう」……そう思った。

そう思うと、少しホッとした気持ちになった。

「ローマを逃げ出すんだ」

「ローマから離れさえすれば……」

第三章 フィレンツェへ

一、メデイチ家

1997年6月1日(日)

ローマ・テルミニ駅5時53分、今、フィレンツェへ向かう2等列車の中にいる。駅の売店で大声を張り上げ、なんとか朝食となるサンドイッチを手に入れた。駅の売店は朝のカプチーノを飲む客でごったがえし、上品にしゃべっていたら見向きもしてくれない。いきおい大声を張り上げることになる。

「わかった、わかった。あんたはこのサンドイッチとカプチーノが欲しいんだね……」と、やっとそんな感じで対応してくれた。

2等車の席に落ち着き、苦労の結晶であるサンドイッチにかぶりつく。そう言えば、昨日、フォロ・ロマーノで遅い昼食代わりのパンをかじって以来、何も食べていない。ホテルへ帰ってから夕食をとろうと思いつつ、帰り着くや、そのまま深夜まで寝込

んでしまった。目が覚めてからは、自分の中の恐怖心との戦いだった。

空っぽの胃に、熱いカプチーノとサンドイッチが流れ込んでいく。まるで心まで癒されていくような感じだ。食べながら自分の中に心を向けた。涙がカプチーノの中へポタポタと落ちた。

腹がふくれるや、眠気が襲ってくる。たちまち眠りの中に落ちていく。

途中、賑やかな女性の声で目が覚めた。若いアメリカ女性の二人連れた。私の向かいの席に座った。軽く会釈を交わしただけで、後はまた眠りの中へ……。夢見心地の中で前の二人の会話が聞こえてくる。英語でしゃべっているのに、どういう訳か話の内容がわかってしまう。

「若そうに見えるけど、結構、年かもよ……」

「もしかしたら日本のタレントかなんかじゃない……」

その言いようが、あまりにも人をバカにしたように聞こえて、ぼんやりした夢の中で、一人、憤っている自分があった。

朝9時前、フィレンツェに到着、目が覚めたときには、二人の早口の会話は、もう聞き取れなくなっていた。列車を降りるや、いつでも日本に電話できるよう、ま



サンタ・マリア・ノベッラ教会

ず駅の売店でテレフォンカードを購入する。その後9時になるのを待って、駅の両替所で日本円をリラに替えてもらう。難しく考えていた現地での両替も、意外と簡単に運び、結構、自信を持って駅を後にした。

ところが、駅前にあるサンタ・マリア・ノベッラ教会にさしかかった時だ。一人のジプシーの母親が、十歳ぐらいだろうか、目鼻立ちの整った娘を連れ、黄色く焼けた新聞を広げ何か喚くようにこちらへ近づいてくる。「新聞を買ってくれ」とでも言っているのだろうか。キョトンとしている間に、いきなりその母親が抱きついてきた。……と、一人の老婆が大声で何事かを叫びながら駆け寄ってきて、そのジプシーの女性を引き離した。

母娘のジプシーは逃げるようにして、その場から走り去った。

「大丈夫かい？ ポケットの中を確認しな」「何もなくなっちゃいないかい」「財布に気を付けるんだよ……」

不思議に言っていることがわかる。でも、なんと答えていかかわからず、やっと「ゲラツエ」とだけ答えを返した。

うれしかった。ジプシーの母娘を憎む気にもなれず、むしろ幼いジプシーの娘の顔がいつまでも目の裏に焼き付いている。こんなことがローマで起こったら、しばらく恐怖心でパニックになっていただろう。ところが、このフィレンツェでは、変に安心感がある。何があっても大丈夫だという思いがある。治安の面ではローマ以上に悪い。現に、一人になってしまうと、どこからか得体の知れない男が現れ、声をかけてくる。と、これまたどこから現れたのか、警官が近寄ってきて、男はすぐとその場から離れていく。

そんなことが何度も起こった。その都度、警官と言わず、民間の人にまで助けられた。それでも、何が起ころうとも大丈夫だという思いは依然と強い。ローマでは気が狂うかと思っただのに、ここでは家に電話をかけるゆとりも生まれた。

このフィレンツェでは、一つの思いがいつも私を包んでいるようだった。



メディチ家の紋章パツレ

「この日本人をどんなことをしても無事に日本へ帰す……。」
 そんな思いを、いつも感じていた。

やがて、その正体に気付いた。メディチ家だ。

街自体が、今もメディチ家という大きな意識の中にスッポリと包まれている。フィレンツェ中どこを歩いても目に付くメディチ家の紋章——パツレと呼ばれる六つの、時には八つの球で構成されたメディチ家の家紋——今も残るメディチ家の離宮で、初めてこの紋章に出会った時、この安心感の正体がわかった。その中庭に立つて、周囲を取り巻く壁にメディチ家の紋章を見た時、なんとも懐かしい思いが、ある名前とともに噴き上げるように込み上げてきた。

ロレンツォ……。

この離宮の小さな一室が、今、一般公開されている。十人も入れればいっぱいになるような小さな部屋だ。その部屋に入るや、一つの視線にさらされる。壁を取り巻く極彩色の絵——東方の三賢者がベツレヘムで生まれたイエスに会うため、馬を進めている。その三賢者の一人ひとり、メディチ家の当主の肖像として描い

たのが、この壁の絵だ。なかでも目につくのが騎乗の少年像、きらびやかな衣装、そして、その斜め横に流した目線が、どこから見ても見る者をとらえて離さない。メデイチ家最盛期の当主ロレンツォ・デ・メデイチだ。イタリア・ルネサンスを支えた中心人物であり、新プラントン主義の名に代表される神秘主義研究（鍊金術、占星術、暗記術、カバラ主義、グノーシス主義等々の総合研究）の最大のパトロンだった人物でもある。そのロレンツォの子供時代の肖像が、東方の三賢者の一人として描かれている。その眼差しが心をとらえて離さない。

ロレンツォ……。

ちなみに、フィレンツェでは宿泊するホテルが決まっていない。まずホテルを探さねばならない。そして見つけたのがホテル・ロンバルディだった。ヒューム通りにあつて、一つ星のホテルということだから三流ホテルということになるのだろうか、これが非常に清潔で、若いスタッフの態度が実に気持ちがいい。おまけに主人が大変な親日家で、突然訪れた私を、安くて気持ちのいい部屋に案内してくれた。

朝食付きで五千円位になるのだろうか。ベッドは大きく、部屋自体がどっしりした感じで、しかも清潔だ。たちまち、その部屋が気に入ってしまった。



ゴッツオリ『東方三博士のベツレヘムへの旅』

ところが、その部屋に飾られているレプリカ（複製）の絵が、先ほど見てきたロレンツォの肖像だった。それはベッドの横に飾られ、私のフィレンツェ滞在中、あの不思議な視線で絶えず私を包んでいた。それが妙な安心感につながっていた。

メデイチ家の紋章のあるところ、メデイチ家の息のかかったところなら、たとえば何があるうと大丈夫だ、そんな安心感が自信となった。ローマでのおどおどした感じに比べ、フィレンツェでは自由にのびのびと歩き回れる。

サン・マルコ修道院とその図書室、メデイチ家の離宮、サンタ・マリア・デル・フローレ、ジオットの鐘楼、ヴェッキオ宮、サン・ロレンツォ教会、そしてウフジ美術館、バルベデーロ要塞と、どこにでもメデイチ家の影が濃厚に残っていた。

観光客がまだ現れない早朝のフィレンツェを歩いていると、表現しようのない思い——懐かしい、うれし



サンティッシマ・アヌンツィアータ広場にある捨て子院

い、苦しい、悲しい、どれとも感じが違い、それでいて、そのすべてであるような——何とも言えない思いが堰を切ったようにあふれてくる。ローマでの重苦しい、絶えず緊張感の中にいるような思いとは、まるで正反対のような……。

中でも心が惹かれたのは、サンティッシマ・アヌンツィアータ広場にある捨て子院。ルネッサンスの陰で、人間の自由が叫ばれるのに比例して、孤児の数も急増した。ここへ子供を捨てにさえ来れば、誰に顔を見られることもなく、良心のとがめも少なく子供を捨てられた。余談だが、このような捨て子養育院で、私たちが現在使っているような粉ミルクが考え出された。またヨーロッパを支える名も知



フィレンツェの城門

れぬ人材がここから数多く生み出された。

ロレンツォは人材を愛した。彼を支えたブレイン、特にユマニスト（人文主義者、神秘主義研究者）たちの中に、この養育院出身の人材がいたとしても、決して不思議ではないだろう。

それはさておき、トマス荒木も、このフィレンツェを二度訪れている。一度は日本からローマに向かう旅の途中。そして今一度は、ローマ滞在中、キリスト教文献収集作業の過程において。時代はロレンツォの死から百余年が過ぎた一五九九年のこと。私はトマスが真つ先に足に向けたであろう、サン・ロレンツィアーナ修道院へ足に向けた。その図書館



メディチ家のリカルディ宮

にはメディチ家が集めた膨大な文献がある。このサン・ロレンツィアーナ図書館こそ、トマスのもっとも行きたかった場所だったに違いない。ところが、行ってみると「日曜日は休館だ」と言う。やむなく宿を見つけ、フィレンツェに滞在することになった。そして見つけた宿というのが、先ほど話したホテル・ロンバルディという訳だ。

二日目の早朝、まだ街が観光客に埋まる前、ひっそりと静まり返ったフィレンツェの通りを歩いた。そして、ここかしこで、あふれてくる思いに何度も泣いた。泣きながら歩き回った。人が来れば顔を背け、何か建物でも探しているふりをした。ひとしきり歩き回り、ひとしきり泣いてホテルへ帰った。

朝食に出されたカプチーノが絶品だ。パンにベーコンエッグ、それにヨーグルト、オレンジジュース……こんなにゆつくりと食事するのは久しぶりだ。何年も逃げ回って、やっと家に帰ってきたという感じだった。腹ごしらえも終わり、いよいよサン・ロレンツィアーナ修道院の図書館へと向かう。

二、サン・ロレンツィアーナ修道院

修道院の中庭を巡る回廊、その途中に二階へと上がる階段がある。二階にも同じように回廊があり、まずはこの回廊を一巡りしてみる。狭い窓から金網越しに書庫や資料室の様子がわずかながら窺える。中庭には、草花に埋まった花壇の中央に一本のミカンの木が植えられてある。そして回廊の屋根越しにサンタ・マリア・デル・フロレー（花のサンタ・マリア教会）の大きなドウオーモが辺りを圧倒している。回廊を一巡し、階段の所へ戻るが、その右手にある大きなドアが図書室への入り口だ。ドアを入ると、横手に大きなメデイチ家の紋章が掲げられてあり、その反対側には、図書室入り口へ三方向から伸びる流れるような階段がある。まるで川の流れが、低い落差のところで三方向へ流れ落ちてでもいるかのような、なめらかで、それでいてリズム感のある曲線だ。

聞けば、ミケランジェロの設計になる階段だという。

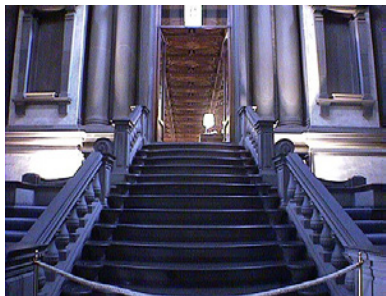
その曲線がやがて一つになり、直線となつて上っていく。その頂点に図書室入り口がある。正面からの階段を上がる。上がるに連れ、図書室の全貌がパースペクティブ

のように視界に広がってくる。入り口からまっすぐ奥へと走る豪華な絨毯。上には格子状の天井。両端にはメデイチ家の紋章をあしらった窓。すべてが直線となつて奥の一点に向かつて走っている。そして、絨毯の両脇に並ぶ書見机の列、その数の多さ、そのあまりの整然とした様子、思わずその場に立ちすくんでしまう光景だった。

私の前を歩いている人が、絨毯からはずれ、書見机に手をふれようとした。いきなり係の女性が現れ注意を与える。ピーンと張りつめた空気が流れる。

ところで、その書見机をよく観察すると、側面に何か細かい文字の書かれたリストのようなものが貼られてある。リストは古い時代を誇るかのように、紙もインクの色も変色してしまっている。

係の人をつかまえ、これは一体なんなのかと聞いた。もちろん、すんなりと話が進んだ訳ではない。ポケット辞典を引きながらイタリア語の単語を並べ、時に英語になったり、もどかしくなつて日本語が飛び出したり、あげくは図まで描きあつての大奮闘の結果、この書見机は書棚をも兼ねていることがわかった。今は、貴重な図書のため、すべて書庫へ引き上げられてはいるが、この書見机の正面下の部分が棚になっており、ここに側面リストに掲げられてある図書が収められていたという。資料を探そうとする人間は、一覧表とこの机側面のリストを手がかりに、目的の本が収められている書



サン・ロレンツィアーナ修道院図書室





ジョットの鐘楼からの眺め

見机に行き、ここで本を閲覧するという次第だ。つまり本を机まで運ぶのではなく、人間がその書物の置かれてある机兼書棚まで行き、その場所で書を繙くというやり方だ。

ところで、この書見机のどれかにトマスは座ったろうか。この図書室でトマスが巡り合ったものは何だったろうか。かつて、この図書館は、メデイチ家のカレッジの別荘と並んで新プラトン主義研究の一大拠点であった。メデイチ家のコシモや、その子ロレンツォは、当時のキリスト教的常識を打ち破ろうとした。カソリック的迷信を排し、人間存在の本質を神秘主義の中を探ろうとした。だからこそ、ここにはカソリッ



サン・ロレンツィアーナ修道院 メディチ家礼拝堂

クが異端とする書が秘密裏に集められている。しかし、外見上はあくまで、キリスト教の探求を看板にはしていないが……。

そして、この神秘主義研究の流れに歯止めをかけたのが、ローマン・カソリックだった。一時は、三位一体説まで、ユダヤ神秘主義カバラによって解釈しようとしたのだが、ローマの目をごまかし続けることはできなかった。

トマスが探していたもの、それはベラルミノーによって闇から闇に葬られた「シクストウスの聖書」ではなかったか。トマスは日本語版聖書翻訳のテキストとなるべき「シクストウスの聖書」を求めてローマを訪れた。しかし、



図書が配備された閲覧机（今では本は書庫に保管されている）

彼に与えられたのは、誤植が多いという理由で、その後、ベラルミノーによって手の加えられた改訂版の「シクストゥス聖書」であった。おそらくテキストとしては、シクストゥスの勝手な思い込みが入っていない分、こちらのほうがより優れているであろうが、どうしてもトマスの心に釈然としないものがあった。

「なぜ、一冊も残っていないのか。いくら誤植が多いといっても、ローマ教皇が自ら編纂した『聖書』がバチカン図書館にさえ残っていない。」

トマスは日本へ持ち帰るべき書籍の文献目録をつくる傍ら、秘かに「シクストゥス聖書」の行方を探したのでは

ないだろうか。このサン・ロレンツィアーナ図書館において、彼に何らかの示唆を与えた人物がいたに違いない。

トマスが座ったかも知れない書見机に手を触れてみたくなった。そつと手を伸ばしながら、横に立つ係の女性の顔を振り返ってみた。その女性は、「オーケーだよ」と言わんばかりに、やさしく頷いてくれる。

冷たい木の感触が伝わってくる。ほぼ四百年前、この書見机のどれかにトマスが座った。その思いは掌に伝わってくる机の感触に支えられ、いつしか確信へと変わっていく。指先から起こった痺れは全身へと広がり、体中の毛穴が開ききったかのような感じに襲われた。

三、広がる妄想

その日、エレオノーラは許されて一人の客と面談した。姦通の罪で修道院に幽閉のように閉じこめられ、既に二十年が過ぎようとしている。

その客とは、遙か日本から来たトマス荒木……。二人は中庭をめぐる回廊を歩き



サンマルコ寺院の中庭と回廊

ながら話した。

ロレンツォの時代から百年が過ぎ、共和制都市国家フィレンツェは解体し、トスカナ大公国として再生していた。一度はフィレンツェの街から追放されたメディチ家だが、今ではトスカナ大公国の君主として返り咲いている。しかし、メディチ家に往時の勢いはなく、むしろ熟れたザクロのごとく退廃の極みに達し、トスカナ大公国を興したコジモ一世（初代コジモとは別人）からして、自ら実の娘と実の息子を殺す羽目に陥り、自らの血が招いた忌まわしい出来事の連続に、英味な領主の気性も失われ、次から次へと女性を漁る、さびしくも哀れな男になり果てていた。



トスカ大公コジモ一世

そんな父の摂政を勤め、やがて父の後を襲うフランチェスコ二世も、弟であるフェルディナンド一世に夫婦ともに毒殺される始末であり、まさにこの時代のメデイチ家は地獄のまっただ中を漂っていた。

ここにいるエレオノーラも、そんな男たちの犠牲者の一人だったのかも知れない。父親ほども年の違うコジモ一世に見初められ、その愛人となり、さらにはコジモの息子ピエロに犯され、その事実を隠すために、コジモの部下と結婚させられた。あげくは、その夫から姦通者としてこの修道院に幽閉された。

そんなエレオノーラを訪ねてくれる唯一の人物が、フィレンツェ大公女ビアンカ・カッペロであつた。

ビアンカは、ベネツィアの名家カッペロ家の令嬢だ。それが一介の銀行書記ピエトロと駆け落ちをした。ピエトロはベネツィアでも名うてのプレイボーイ。ビアンカは、その美貌とカッペロ家という家柄ゆえに、ベネツィア中の男性から熱



フランチェスコ一世

い目で見られていた女性だった。

女性の処女性、政治や経済上の駆け引きにも高い商品性を持つ時代であり、ビアンカもいずればヨーロッパの名家と縁組みする運命だったろう。その大事な駒を横手からかつさらわれたのだから、カッペロ家としては腹の虫がおさまらない。たちまちピエトロの首に懸賞金がかけられ、たくさんの刺

客が二人の足どりを追った。

捕らえられれば、ピエトロは即刻死刑、ビアンカは修道院に幽閉される。

そんなピエトロが、ビアンカを連れ、逃げ込んだのが、フィレンツェの両親のもとだ。フィレンツェはベネツィアとは対抗関係にあり、常に熾烈な争いを繰り返している。それだけにビアンカの扱いも難しいわけだが、それ以上にフィレンツェの民衆は、この二人にやんやの喝采をおくった。

二人の話は、たちまちフィレンツェ中を駆けめぐる。フィレンツェの若い男た



大公女ビアンカ・カッペロ

ちは、命がけで深窓の令嬢を勝ち取ったピエトロに拍手を惜しまない。と同時に、垂涎の眼差しを隠そうともしなかった。当時はまだ摂政の地位にあったフランチェスコ一世も、ビアンカに興味を覚え、彼女を一目見ようと彼女の家をそつと訪れる始末だ。

将来フィレンツェの大公となるべきフランチェスコ一世がビアンカを見た。そのときから、またまたビアンカの運命が大きく動いた。フランチェスコはビアンカを見初め、彼女を愛人として自らの屋敷に迎え入れた。ピエトロにしても、彼女に飽きてきたところだ。フィレンツェでの貴族の地位と交換に、ビアンカをフランチェスコに譲ることになった。

フランチェスコは、この時代、メディチの人間としては家庭的な人間だと思う。確かに、父のような英雄的で非凡な人間ではなかった。ただ彼は、ビアンカという一人の女を愛し続け、彼女もこれに応えた。



フランチェスコ一世の書斎

ただ彼にはハプスブルグ家から嫁いできた妻ヨアンナがいた。妻ヨアンナにとっては悲劇だったに違いない。美貌、教養、やさしさ、どれをとってもビアンカにはかなわなかった。浮気ならまだ許せるだろうが、フランチェスコは、ビアンカしか目に入らなかった。どれだけ二人を呪ったか知らない。時にはビアンカに刺客を向けることもあった。……が、すべて失敗に終わりを

あげくは自分の方が先に死ぬ羽目に陥った。

こうしてトスカーナ大公女となったビアンカだったが、この時代、ヨアンナや自分をはじめ、たくさんの女の苦しみその目にしてきた。エレオノーラにしてもそうだ。男の身勝手に振り回され、修道院に監禁同様の身の上……まかり間違えば、自分が修道院に幽閉されていたかも知れない。ビアンカは夫フランチェスコに何度、彼女の赦免を願い出たか知れない。



トスカーナ州を流れるアルノ川

それが叶わないと知ったとき、せめて彼女を慰めようと、彼女を修道院へ訪ねる日が多くなった。

そんなエレオノーラが、唯一、修道院から出た日がある。

遙か日本から四人の少年たちが、ピサの港に着いたときのことだ。ビアンカのたつての願いで、少年たちの歓迎パーティへの出席が認められたのだ。少年たちがローマ法王への宗教的な使節だったことが、修道女であるエレオノーラの参加をたやすくしたのかもしれない。

エレオノーラにとっては夢のような毎日だった。ピサへの旅行。華やかな舞踏会の雰囲気。見たこともない東洋

へのあこがれ。初めて踊るダンスに、ステップを間違えながらもぎこちなく最後まで踊った日本の少年たち、ビアンカの抱擁に耳まで真っ赤にした日本の少年……。

そして、この翌々年、フランチェスコ一世とその妻ビアンカは、実の弟であるフェルディナンド枢機卿に毒殺され、もはやエレオノーラを訪ねてくれる人は誰もいなくなつた。

その後、エレオノーラは終生、修道院から出ることはなかつたが、何かにつけ思い出すのは、あの歓迎舞踏会のことであつた。

そんなエレオノーラの前に、またも日本からの来訪者が訪れた。エレオノーラは、トマスを前に、驚きを隠そうとはしなかつた。というのも、彼女の知っている日本の少年たちは、まるで人形のようにぎこちなく、神父たちの言いなりに動いているように見えた。しかし、今、目の前に立つ青年は、自分の意志で、とんでもないものを探そうとしている。

「シクストウスの聖書……」

エレオノーラはビアンカ大公女を通じて、その間の事情をすべて知っていた。ノストラダムスによって知らず知らずユダヤ神秘主義の影響を受けたシクストウス五



ユマニストの研究室

世のこと、そしてその編纂した「シクストウス聖書」のこと、この聖書を異端として秘かに回収処分し新たに改訂版を出したベラルミーノ枢機卿のこと、そして、ものの本質や、その存在の秘密を探り出そうとするユマニストたちとバチカンの対立のこと……。

フィレンツェは神秘主義研究の拠点であった。それはトスカナ大公国に変わってからも変わることがない。初代大公コジモ一世自体、ユマニストの擁護者であり、化学の研究者でもあり、出版事業のプロデューサでもあったのだから。

トマスは彼女を通し、フィレンツェで神秘主義と出会い、大きくその影響を受けることとなった。そして、彼女の口から意外な事実を知る。ただ一冊、残された「シクストウス聖書」の行方を知る人物がいるという。それもローマに……。

その人物というのが、最後のユマニストと呼ばれたジオルダーノ・ブルーノで

あった。彼は、異端者として告発され、ヴェニスで捕らえられ、今はカステル・サンタンジェロの牢獄にいますという。彼に会えば、「シクストウスの聖書」の行方もわかるだろうと……。

トマスは、「シクストウス聖書」もさることながら、それより何よりブルーノという人物に会って見たかった。

私は今、ロレンツィアーナ図書館の奥間で、メディチ家が集めた古文獻の中にいる。今ではガラスケースの向こうにしか見ることができない数多くの資料。でも、あの紙の手触り、あの紙のにおい、大型本の頁をめくるときの音と感触が、自分の中でよみがえってくる。

トマスはローマへ帰った。

そして、カステル・サンタンジェロの闇の中で、ブルーノと出会い、カンポ・デ・フィオーレの青空の下、ブルーノの火刑に立ち会わされた。ブルーノの処刑に立ち会った五人の修道士——深々と顔を覆うそのフードの下に、一人の日本人の顔が隠されていた。



ある異端審問官の肖像

処刑後、呼び出された異端審問所で、トマスは神秘主義への関心を断ち切られた。と同時に、トマスは自らの心の底からキリスト教を閉め出した。日本へ帰る日まで、トマスはベラルミノーの監視下に置かれ、やがて教区司祭という形だけを引きずり日本への帰路についてのである。

ホテルへ帰り着くと、キャセイ航空から香港へ帰る飛行機便が遅れる旨、連絡が入っていた。その便でOKなら連絡は不要だという。一抹の不安が残り、メモにある電話番号のところへ電話を入れるが、どうしてもつながらない。伝言を聞いてくれたフロントの男性もやってみてくれるが、それでもつながらない。彼は責任を感じたのか、フィウミチノ空港の電話番号を調べ、何とか連絡を取ろうとしてくれるのだが、それでもうまくいかない。面倒くさくなり、念のため、明日は早立ちすることに決め

「明日は朝食はいらない」と伝え、部屋に入った。

いよいよ明日はイタリアを離れる。一時退避のつもりで来たフィレンツェで長居してしまった。ローマでまだ行かなければならないところを残したままだ。でも、今のまま、またローマへ戻る気にはなれない。

いつになるか、また日を改めることにしよう。

明日は空港へ直行し、予定通り、香港を経由してマカオへと向かうことにする。明朝、ホテルのカプチーノが飲めないのも残念だが……。

第四章 ローマの心残り

一、サンタンジェロ橋に出る美貌の幽霊

ローマはサンタンジェロ橋に、薄幸の美少女の幽霊が出るという。小生は、なんとか無事イタリアを離れマカオへ向かうこととなったが、ローマを離れる前にどうしてもこの人物のことを紹介しておきたい。人物と言うより幽霊と言うべきかも知れないが……。それはローマっ子なら誰でも知っているベアトリーチェ・チェンチという美少女。彼女もまた、トマスと同時代をローマに生き、父親殺しの罪で、ブルーノと同じサンタンジェロ牢獄に入れられ、ブルーノよりやや早く兄弟や継母とともに処刑された。

トマスの物語では、重要な役割をはたす人物なのだが、これについては小説のほうで読んでいただくとして、ここではスタンダールの書いた「チエンチ一族」をもとに、事件の概略だけを紹介しておくことにしよう。



グイド作「ベアトリーチェ・チェンチの肖像」

前ページの写真は、グイド作「ベアトリーチェ・チェンチの肖像」と言われる作品だが、最近はこれに対する疑問の声が起こつてきている。グイドがローマへ来たのが、一六〇〇年に入つてからのことで、ベアトリーチェが処刑されたのが一五九九年秋のことだから、グイドはベアトリーチェのことを知らない。しかも、この肖像画は「女占い師」と呼ばれていて、シビラの神殿に仕える巫女を題材としたものだというのが、勿論、これに反対する声もあるが、真偽のほどはともかく、この事件の悲劇性とベアトリーチェの美しさ故に、芸術家たちの想像力をかき立て、その都度、この絵がイマジネーションの源となつてきた。

ベアトリーチェという少女の美しさは、当時の資料にくだいまでに繰り返されてきた。たとえば、彼女を助けようと、ローマ駐在の外交使節たちが、ローマ教皇宛て助命嘆願をおこなつたり、サンタンジェロ牢獄の副所長が彼女の美しさに惹かれ、結局実行できなかつたというものの、彼女を脱出させる計画を練つたことを書き残しているし、彼女の死刑が行われたとき、ローマ市民の暴動さえ起こつている。各国外交使節に助命嘆願を出させ、ローマ市民に暴動をおこさせ、後世には文豪スタンダールをして「チェンチ一族」を書かしめたベアトリーチェ。彼女は一体どんな罪を犯したというのだろう。

二、バチカンの秘密

父親殺し……家族共謀しての父親殺しがその罪状である。

ベアトリーチェの父クリストフォロ・チェンチは女癖が悪く、後妻に迎えようとした女性も亭主のある身を強引に誘惑したと言われている。そのうえ家族への暴力も絶えない。娘のベアトリーチェさえ手込めにしようとした、そんな典型的な悪人。そんな父親を、継母や兄と共謀して殺害した、これがベアトリーチェの罪状である。しかし不思議なことがある。バチカン自ら調査に当たり、貴族には拷問が科せられないことになっているにもかかわらず、過酷な拷問が無実を主張するベアトリーチェや兄弟に科せられた。各国使節からバチカン宛ての嘆願書も、世論も無視し、強引に処刑へ持っていった、そんな感じがするのだ。口さがないローマっ子たちは、バチカンがチェンチ家の財産目当てに仕組んだことだと噂しあつた。

大いにあり得ることだが、まだ、もう一つの可能性がある。ベアトリーチェの父親が、バチカンの秘密を握っており、その口封じに彼を暗殺し、その家族も父親殺しの罪を着せて葬り去った、そう考えることも、あながち突飛な推測ではないと思う。

クリストフォーロは、シクストウス5世の時、バチカンの事務に深く関わりを持っていたのだから……。もし彼がシクストウス聖書の成立と、その抹消に関わる秘密を握っていたとしたら……。

ローマ教皇は、カソリック教会のトップであり、どんな間違いがあってもならない。また聖書もおなじであり、これにどのような誤謬ごびやうがあってもならない。教皇と聖書に関するゴシップは、カソリック世界全体を揺るがす問題になりかねない。

三、一五九九年九月十一日

ともあれ、ベアトリーチェ等は、投獄から九ヶ月後、一五九九年九月十一日の朝、サンタンジェロ城前の広場で処刑された。継母ルクレツィアは未亡人としての黒服、ベアトリーチェは対照的に白い衣装だったという。この時の様子をメディチ家の使者は、次のように記している。

「少女の遺体は、市民たちの手によって、モントリオの聖ピエトロ教会に運ばれた

が、市民たちはすっかり同情し、まわりを蠟燭の光で囲まれた死体にすがって、夜中までやってきては泣いていた。それは、彼女の証言に耳を貸さず、弁護しようともせず、死へと追いやった法王クレメンテに抗議し、神の復讐を願いながらのものだった。彼女の死は、あまりにも神聖なる死だった」（島村菜津訳）

ところで、このページに掲載した「パラツォ・チェンチのバルコニー」の写真は、同朋舎出版発行、地球・街角ガイド「ローマ」から掲載させていただいたものだが、その本文には、「この館は、魔術を使って非道な実父を殺したかどで、兄弟と継母とともに告発されたベアトリッチェ・チェンチの一家のものだった。彼女は死刑を言い渡され、一五九九年にサンタンジェロ橋で打ち首になった。現在の建物は



パラツォ・チェンチのバルコニー（同朋舎出版「ローマ」）

一五七〇年代に建て替えられたものだが、どことなく中世的な不気味さを漂わせている。プロGRESSO通りに面する正面は半月の紋章で飾られ、反対側正面には美しいバルコニーがある。館のなかにはイオニア式涼み



サンタンジェロ 城壁の内部

廊下を備えた伝統的な中庭があり、部屋も多くは、悲運のベアトリーチェが子どものころに親しんでいたであろう一六世紀の装飾をいまでもそのままに残している」と紹介されているが、残念ながら、この建物は現在非公開で、遂に覗くことが出来なかった。

心残りではあるが、次の機会があればということ、マカオへ移動することにする。

第五章 マカオへ

一、マカオ海事博物館

6月5日(木)朝7時10分、香港に到着する。空港にはベレー帽に自動小銃を抱えた兵士の姿が目立つ。

大急ぎで入国審査を終えると、フリー埠頭に行くべくバスに乗り込んだ。その途端、ザーツと雨が降りだしたが5分ぐらいで青空に戻った。と、思ったら、またも空が真つ暗に曇り、しのつくような大雨……。後で知ったことだが、この後、香港は雨の被害で大変だったようだ。マカオで見たテレビのニュース番組で、雨で川のようになった香港の街が映し出されていた。

しばらく走るとバスは通勤客でいっぱい、バスの外も二階建てバスや乗用車でごったがえしている。香港返還まで後一カ月……でも街は何ら変わった様子もなく、忙しそうに動いている。活気があるというのか、忙しそうというのか、香港は本当に

ザワザワとした喧噪の中にあった。

小一時間も走ったろうか、いつしか車中も静けさを取り戻し、フェリー埠頭へと到着した頃は乗客もまばらになっていた。

フェリーの出発時間は9時15分だと言う。5分しかない。エスカレータを駆け上がり、栈橋へ出、走りに走って何とか時間までに滑り込んだ。2等船室に案内されると同時に、出発を知らせるサイレンが鳴った。これから、いよいよマカオへと向かう。おさまっていた雨が、またも降り出し、窓の外はみるみる真つ暗な海へと変わっていく。停船していた時は、あんなに揺れていたジェットフェリーだが、走り出すや、嘘のように揺れはなくなっていく。



マカオ サンマルコ通り

マカオに着きフェリーターミナルを一步出るや、タクシーやペティキャブ（輪タク）の運転手たちが次から次と声をかけてくる。「足があるから歩くよ」「ウォーキング、ウォーキング」と叫びながら自分の脚を叩いて見せる。ペティキャブの若い運転手が笑って手を振ってくれた。

ところが、いざ歩き始めたものの、その選択が間違いであつたことを間もなく思い知らされた。

ともかく暑い。カラッとした地中海性気候に馴染んだ身体に、マカオの気候は、何とも厳しいものがあつた。少し歩いただけで、汗が溢れるように吹き出してくる。その上、道に迷ってしまった。

若い女学生をつかまえて道を訊ねる。中国語が通じる。これが香港なら、こうはいかない。香港の人にはこちらの話を聞こうとする余裕がないのだろうか。広東語も、英語も話せない人間を完全に無視している。そうとしか思えない。中国語（普通話）を話しても、まるで聞こうとしてくれない。それが、ここマカオでは違う。こちらの言うことをじっくり聞こうとしてくれる。少なくとも、その思いが感じられる。だから広東語でなく、下手な片言の中国語でも通じる。それがうれしい。彼女もじっくり辛抱強く私の言うことを聞いてくれ、汗びっしょりの私の顔を見つめながら、

歩くのは無理だからと、バス停まで私を引っ張ってきてくれた。

しかし、バスは来ない。

しかたなくタクシーを止め、彼女に礼を言って別れる。

私はタクシーに乗り込むや、「ハイシー・ポウークワン（海事博物館）」と行き先を告げた。だが、通じない。シヨックだ。慌てて手帳に行き先を書き付け、差し出した。

……………通じた。

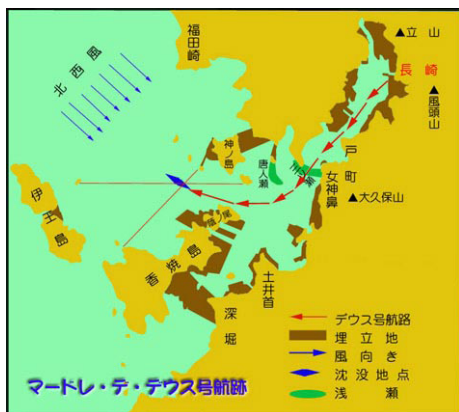
それから先は、何とか、片言でも話が通じるようになった。

やがて最初の目的地である「マカオ海事博物館」へと到着した。

タクシーを降りる時、運転手が笑いながら「留心（気をつけて）」と中国語で声をかけてくれた。



天理図書館正面を飾るマードレ・デ・デウス号搭載大砲



二、マードレ・デ・デウス号事件

もう二十年も昔のことになる。ある事件の取材に奈良の天理図書館に通い詰め、長崎の街を歩き回ったことがある。その事件というのは、マードレ・デ・デウス号事件……徳川幕府がキリスト教を弾圧する引き金となった事件だ。

事件の発端は、マカオで一六〇八年に発生した。有馬晴信派遣の朱印船が占城（チャンパ）からの帰途、風を失いこのマカオに寄港した。このときすでに同地には、東京（トンキン）からの帰途遭難し、中国船を略奪しこれに乗ってマカオに避難していた別の日本人の一行があった。

二組の日本人グループは、ポルトガル側の制止をよそに、武器を携え市中を横行し、ついには日本・ポルトガル商人間に商貨の買い上げをめぐる紛争を生じ、仲介に当たった陪席判事まで負傷させるという事件が起こった。いわゆる日本人騒擾事件



の発端であるが、この暴動を徹底的に鎮圧したのが、マカオ臨時総督（カピタンモール）アンドレ・ペッソアだったのである。彼は日本人暴徒の団を一件の建物に追い詰め、火焰筒で火をかけ、逃げ出してくる日本人たちを次々と撃ち殺した。さら

に彼は、首謀者と思われる日本人を捕えるや、後日の日本政府への弁解のため、この事件の原因がすべて日本人にあるという証言を強要し、そのあげく、男をその場で絞首刑に処してしまったのである。

翌一六〇九年六月、そのペッソアがマードレ・デウス号で長崎へ入港した。有馬晴信はこれに対し、報復措置としてデウス号を長崎港に釘付けにし、その積み荷の差し押さえをはかる。ペッソアは身の危険を感じ、逆風を押してデウス号を長崎から脱出させようとする。日本側は、逃げるデウス号を小舟で包囲し、火船や櫓船まで用意し、デウス号拿捕をはかる。こうして三日間にわたる海戦の末、マードレ・デウス号は、香焼島を過ぎた辺りで遂に力つき自爆した。

大音響とともに真つ赤な火柱が上がり、デウス号は艦^{しも}が真つ二つに切断され、三十三尋^{ひろ}の海底へと沈んでいった。長崎在住のポルトガル商人アビラ・ヒロンは、このとき「この都市全体がしばらくゆれたほどであった」と、その凄まじさを『日本王国記』に記している。

問題はその後起こった。

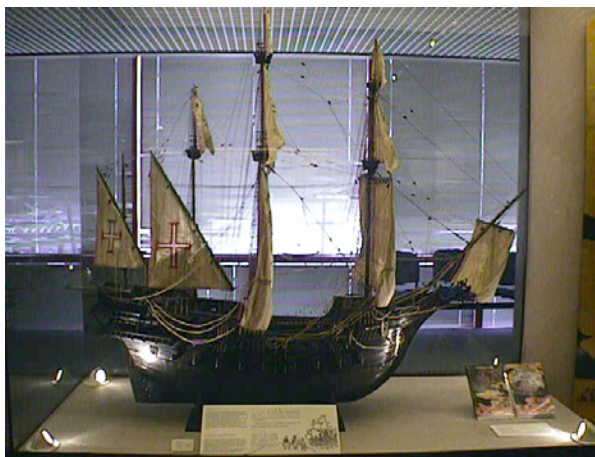
事件の論功行賞をめぐって賄賂事件が発覚したのだ。

ことの詳細はこうだ。

有馬晴信が、このデウス号爆沈の戦功にと、かつて幕府に召し上げられた肥前三郡の返還を幕府に願ひ出たのである。これに応じたのが、幕府の重臣筆頭・本多正純の家臣岡本大八である。彼は、多額な運動費と引き換えに「旧領安堵」と認^{しんた}めた家康の朱印状を与えた。

ところが、この朱印状——まっかな偽ものだった。

朱印状は貰ったものの、いつになってもことが成就しないのに不審を抱いた晴信は、本多正純に事情を訴え出る。ここに岡本の欺計が発覚し、逆に晴信を恨んだ大八は、デウス号事件の際、晴信が意見の衝突から長崎奉行暗殺を企てたとの重大証言をすることになる。



デウス号と同タイプのナオ型帆船（マカオ海事博物館）

審議の結果、家康は、有馬晴信に切腹、岡本大八に火炙りの刑を命じたうえ、二人が共にキリスト教徒であることを問題にし、遂にキリスト教禁止を決意した。

そして一六一二年三月二十一日、大八が三条河原に火炙りに処せられたその日、京・長崎・有馬に禁教令が発せられた。

こうして日本のキリスト教徒にとっての平和な時代は終わったのである。勿論、幕府が禁教令に踏み切った背景には、オランダやイギリスが対日貿易を開始し、ポルトガル貿易だけに頼らなくてもよくなったという経済的な側面を無視することはできない。

……が、ここではそこまで立ち入っている暇はない。

三、海事博物館と参事会図書室

私は今、マカオ海事博物館にいる。ここには、十七世紀初頭のマカオの姿が模型として再現されている。そして、マードレ・デ・デウス号に積まれていた大砲の弾丸もあるはずだ。

二十年前、天理図書館ではじめてマードレ・デ・デウス号搭載の大砲に出会った。図書館入り口に据えられた鑄鉄砲は、心ない客が、その砲身をごみ箱代わりにしていた。砲身の長さ約二三センチ、口径約一二センチ、砲尾の最も太いところで外周約一三〇センチ、先端部の外周約八三センチ、砲身の中ほどよりやや後方に砲台に固定するための砲耳が突き出ており、砲尾火穴のすぐ上にERの刻字が認められる。おそらく、ポルトガル国王EMANUEL REXの略であろう——これは寒い中、メジャーで大砲の諸測値を取ったものだが、今でも、その時の鑄鉄の冷たい感触が掌にはつきりと残っている。

昭和初期、このデウス号の引き揚げ作業が、イギリス陸軍のC・R・ボクサー教授の陣頭指揮で行われた。ボクサー氏は近世海外交渉史の研究家でもあり、当時、



デウス号搭載大砲の砲尾 火穴の上にERの刻字

日本陸軍に顧問として派遣されていた。
この時の搜索では船体は発見されず、
一部の貨物と積載大砲やその弾丸が引き
揚げられたに過ぎないが、その大砲が、
当時できたばかりの天理図書館に引き取
られることになった。そして、その弾丸
はマカオにある海事博物館へ……。
いずれもボクサー教授の采配のもと
に行われたことらしい。

しかし、その弾丸が展示されていな
い。かつて調べた本には写真まで載っ
ていたというのに……。入り口の受け付け
のところへ戻って、そのことを聞いてみ
る。事務の人は若い学芸員らしき女性を
呼んできた。そこにガードマンまで加わ



マカオの市評議会図書館

り、みんなが何事かと耳を傾ける。例によつてあやしげな中国語や英語を交えて、デウス号に積まれていた弾丸について説明する。話が複雑になってくると、ノートを広げ筆談におよんだ。

いつの間にか、自分の回りにちょっとした人だかりができている。大げさな事になったものだ。でも、ともかく、こちらの言わんとすることは理解してもらえた。だが、その学芸員の人は、「自分が来てからは、そんなものは見たことがない」と言う。

みんな、ガヤガヤと話し始め、年輩の人が学芸員の女性に何かささやいた。彼女は私に「少し待つように」言うのと、何人かの人を連れて奥へ消えていった。



火災で焼け残ったサン・パウロ教会の前壁

どれぐらい待ったろうか。その間、彼女は古い人に聞いたり、手がかりになるものがないか探したりしてくれたが、結局、わかったことは、その弾丸は、もうマカオにはなく、日本へ買い取られたらしいということ。

（どうも、今は大砲と同じく天理図書館にあるらしい。）

彼女はひどく残念がってくれ、「当時つくった対日貿易に関するパンフレットが残っているかも……」という他の館員の言葉を聞きつけ、そのパンフレットだけでも持って帰ってもらえたらと、事務所を探し始めた。

でも、結局、これも出てこなかった。彼女は若々しく「ぜひまた会いたい」

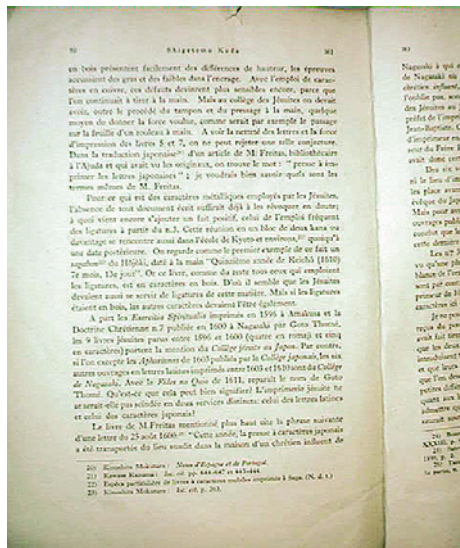
と手を差し出した。

本当に親切にしてもらった。大砲の弾より何より、彼女の好意が心にあたたく残った。

マカオでのいい思いではまだある。マカオの市評議会図書館でのことだ。ここには対日関係の資料が集められている。ここに來た目的は、印刷機がどうなったかを知らためだ。

日本に禁教令が出された翌々年（二六一四年十月）、日本にいる外国人宣教師と主だった日本の信徒がマカオ、マニラへと追放された。その総数百四十八名という。マニラに追放された組の中には、高山右近夫妻や内藤如安兄妹がいたし、マカオへ追放された組の中には天正遣欧使節の原マルチノも含まれていた。人間ばかりか、天正遣欧使節と共にリスボンから日本へ來た二台のグーテンベルグ印刷機も含まれていた。

ローマからマカオへと帰ってきていたトマス荒木は、この地で、彼らを迎えることになる。ローマでのキリスト教への幻滅、今また日本からのキリシタン追放、夢を託した印刷機さえ日本から追放されてきた。トマスは陸揚げされる印刷機を見つめながら、夢が終わったことを感じずにはいられない。しかし、彼にはマカオへ残



幸田成友博士のポルトガル語論文

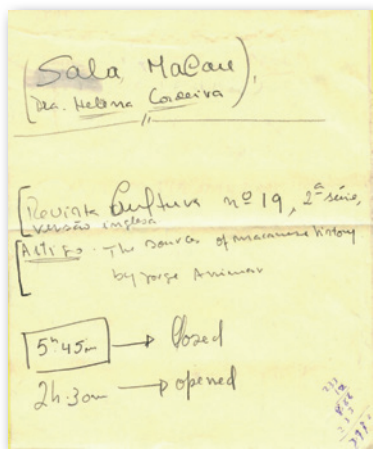
しかし、マカオへ来た印刷機はどうなったのだろう。それがこの市評議会図書館を訪れた大きな理由だ。勿論、ポルトガル語の資料を読めるわけでもないのだが、でも来れずにはおれなかった。

図書館の中はマホガニー材でできているのか、渋い光沢のある焦げ茶色のトーンで覆われていた。壁全体が本棚になっており、やはり茶色の皮で装幀された本の背中

ることは許されていない。日本へ潜入することが義務づけられている。追放された信徒たちの期待の目が彼を縛りつけていた。そして、イエズス会の監視の目も……。

マカオで、トマスは二重の挫折の中にいた。

20) *Memórias do Imperador* (Mém. d'Empereur de Portugal).21) *Relatório do Imperador* (Rel. do Imp. 1818-1819).22) *Relatório do Imperador* (Rel. do Imp. 1818-1819).23) *Relatório do Imperador* (Rel. do Imp. 1818-1819).



中央図書館の場所と、
Helena 博士の名前の入ったメモ

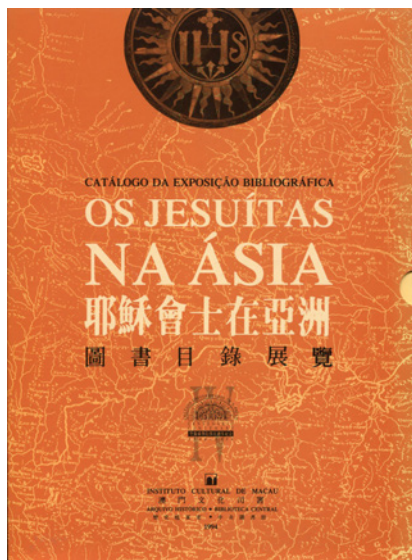
で埋め尽くされている。なつかしい、ホッとするような雰囲気だ。思わず壁を埋める本の一冊に手が伸びる。

いきなり、若い女性の厳しい声が響く。「さわつちゃダメだ」と言っているのだ。ちよいどいい、この女性に聞こう。そう思ってマカオへ来た印刷機の話聞いた。筆談を交えて話していると、奥から年の頃は五十才半ばだろうか、一人のポルトガル人女性が現れた。この図書館の館長だと言う。彼女は中国語のできる女性を呼び、事情を聞くと、係りの人に命じ事務所にあるパソコンを使つての文献探しが始まった。

その間、この本を読みなさいと一冊の本を持ってきた。論文のようだが、ポルトガル語で書かれている。ポルトガル語など分かるはずがない。そう言つて断ると、読めなくてもいいから、この本にとらめっこしていればいいという。「あなたにこの場所を提供する。いつまで居てもいいから、この本をまずよく見ること、いろんな

ことが分かるはずだから。その間に、こちらで手がかりになるようなことを探してあげるから……」と言うのだ。

えらいことになった。あまり時間もないと言うのに……。そう思いながらも彼女の好意がうれしくて、与えられた机に座り、差し出された文献を開く。彼女の言うとおり、分からないからとあきらめず、じっくり見ていると、次第にいろんなことが見えてくる。まず、この論文は、日本の幸田成友博士が一九三九年にポルトガル語で



耶穌會士在亞洲圖書目錄展覽

発表したものらしい。ポルトガル語はわからないものの、耳慣れた単語や書名がやたら出てくる。それを手がかりに約二時間、幸田論文とのにらめっこが続く。結果、アーネスト・サトウ氏の著した The Jesuit Mission Press in Japan を見れば、その後、印刷機がどんな経緯をたどったか分かるのでは……ということに

なった。

となれば、日本に帰ったほうが文献がそろっている。原点史料となれば別だが、研究書や論文の類なら不慣れな外国で探すより、日本で探すほうが有利だ。そんなことを思っている間に、パソコンで検索してくれた結果も出たようだ。館長は、二冊の書名をメモに書き付け、渡してくれた。これらの文献に当たってみれば、印刷機がその後、どうなったか分かるのでは……という。どれもポルトガル語で書かれたものだ。しかも、この図書館にはないと言う。中国語の話せる女性が、もう一枚メモを書いてくれた。「荷蘭圃正街 塔石球場對面 中央図書館」——荷蘭圃正街は地図にあがっている。そこに野球場なのか何なのか塔石球場なるものがあって、それに向かい合って中央図書館があるというのだ。そこへ行けば Helena Cordeiro というドクターがいる。こちらから電話を入れておくから今からすぐタクシーで行けと言うのだ。

ありがたくはあったが、時間もない。こちらにポルトガルの文献を読みこなすだけの力も準備もない。まして文献探しの旅と言うより、現地を歩くことで、いろいろ心に感じることを見つめてみたいという旅だ。まだ肝心な所にも行っていない。サン・パウロ教会とモンテの砦だ。



日本人が建設に携わったというサン・パウロ教会前壁

その旨を話し、今回はここまでにしたいと話した。彼女は微笑みながら、一冊の本を取りだし手渡してくれた。見れば「耶蘇会士在亞洲圖書目錄展覧」とある。マカオに残るイエズス会関係の文献と史料の目録だ。プレゼントだから持っていけという。そのとき、ちよつとしたハプニングが起こった。司書補の女性が「それはもう在庫がないから、あげるのは困る」と言い出したのだ。館長は「私が上げると言っているのだから……」と、彼女の言うことを無視して私に押しつけた。すっかり恐縮した私がいくら断つても、また代価を払うと言つても、聞こうとしない。

司書補の女性も、館長がそこまで言うのだからと、彼女の好意を受けるようにと勧めてくれる。ありがたく礼を述べて、評議会の建物を後にした。

本当に変わった体験だった。マカオくんだりで、日本人の書いたポルトガル語の文献とにらめっこするようになるなどとは思つても見なかったし、それを勧めてくれた女性の館長にも、何か懐かしいものを感じる。

結局、印刷機のその後は分からなかったものの、あの近世リスボンそのままの雰囲気

中で、たとえ二時間とはいえ、一つの机を与えられ、館長や職員の方と一緒に過ごせたことが本当にうれしかった。そのために、ここへ来たようにさえ思った。

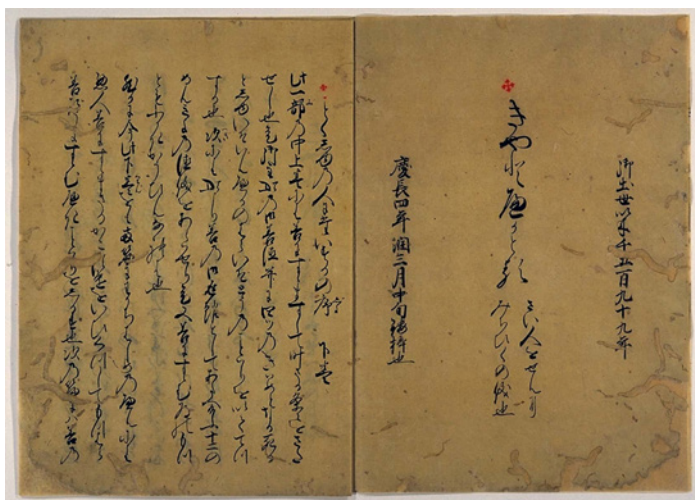
四、サンパウロ教会とモンテの砦

その後、サン・パウロ天主堂へと向かう。

外へ出れば、までも引いていた汗が吹き出してくる。回りを見れば、みんな涼しげに歩いている。私一人が汗みどろという状態だ。

……やっと見えてきた。長い階段の向こうに、焼け残ったサンパウロ教会の前壁がそびえている。追放された日本人の多くが、この教会に施された壁面の彫刻に携わったという。残された前壁の高みに残された彫刻、それを刻んだ日本人の手があった。天主堂は、一八三五年、隣にあったセミナリオから出火し、折からの台風のため、飛び火し、前壁と階段を残して焼失してしまった。

今は焼けてしまった、このセミナリオと教会に、日本から追放されたキリシタンたちが収容された。追放はマカオとマニラの二組に分けられ、総勢百四十八名に達



日本人の手で翻訳出版された「ぎやどべかどる」(救霊の手引書)

したが、マカオ組は二十三人の神父と、その大半が日本人からなる二十九人の修道士、信者の世話を助けた五十三人の同宿、計百五名の多きに上った。収容しきれない人たちは、市内のポルトガル商人の家に分宿したが、二台の印刷機については、セミナリオに運び込まれたことは間違いがない。追放キリシタンたちがマカオに到着したとき、トマスはすでにマカオにあつて、これを迎えることになった。

この時、多くの再会と出会いがあつた。グーテンベルグ印刷機との再会、天正遣欧使節の一人、原マルチノ神父との再会、将来、ローマへ向かうことになるカスイ岐部との出会い。



サン・パウロ教会裏手にあるモンテの砦跡

トマスは岐部に、ローマへ行つて教区司祭になる可能性を示唆した。ポルトガル人宣教師に不審の念を抱く岐部は、やがてマカオを脱出し、船員となったり、聖地を目指す巡礼の仲間になったりしながら、日本人として初めて聖地巡礼を果たした上、徒歩でローマへと入る。

原マルチノは、日本の事情をトマスに伝える。天草のコレジオで指導を受け、印刷のことでは仲間でもあった原マルチノの口から、追放令のこと、そのとき長崎で起こった幕府への抗議デモの如き聖行列の模様、そこで活躍した一日本人婦人のこと。その婦人というのが、実は、天草のコレジオに末次興善に伴われ出入りしていた木村マリアであること。また追放される宣教師の何人かを洋上で救出し、再び日本に潜入させた時も、等安や徳安に混じってマリアが活躍していた……等々を、おもしろそうに語るマルチノだった。

そういえば、当時、マリアはまだ十才だった。失敗した印刷物の断片を使つてはラテン語を教えた娘、そのマリアが、今で



モンテの砦跡 整然と並ぶ砲列

は長崎代官村山等安の子、アンドレア徳安の妻として、キリシタンから頼られる女性に成長している。

「絶対パードレになって帰ってきてね」

「帰ってきたらマリアがお手伝いするかね……」

マリアの幼い言葉がよみがえってきたとき、トマスの心にローマでの苦しい出が込み上げてきた。

「キリスト教に命を懸ける価値があるのか？」

「みんな、ヨーロッパで起こっていることを知らない。キリシタン同士が殺し合っている事実。日本ではキリシタンが火炙りにされるが、ローマでは法皇の名の下に火炙りが行われる。」

「日本へ帰って、俺はどうしたらいい？」

トマスの中で、マリアの幼い顔がいつまでも笑いかけていた。

サン・パウロ教会の裏手にあるモンテの砦へと登った。間もなく陽が沈もうとしている。砦の入り口に記念品を売る事務所然とした建物があり、そこに、まるで番人のようなお婆さんがいた。閉まっではいけないと思い、「まだ大丈夫ですか」と声をかけた。「ああ、早く行つてきな」。言葉は聞き取れなかったが、そういうふうに分かる中では響いた。

城壁に整然と並ぶ砲列。その向こうにマカオの海が広がっている。その海に、今、陽が沈もうとしている。この夕景の中で、トマスと岐部が語り合ったかもしれない。また、トマスと原マルチノが語り合ったのかもしれない。自分の中を陽が沈んでいくような感覚。トマスは、どんな気持ちで、この夕暮れを見たのだろうか。

ちよつと感傷的になりすぎたかも知れない。いつの間に來たのか、先ほどの老婆が横に立っていた。中国語で挨拶をすると、老婆は「中国語かい……」と、さびしそうに言った。香港に次いで、マカオも何年か先には中国に返還されるが、決してそれを喜んでいる風ではなかった。

老婆は、ポツリポツリと話しかけてくれる。内容も覚えていないような、たわいのない話ではあったが、そのときの様子が、心に焼き付いて離れない。そんな時間を、この老婆が運んでくれた。

明日の今頃は、東京へ向かう飛行機の中だろう。お婆ちゃんに、心の底から言った。
「再見（ツァイチエン）……」

旅のおわり

これでトマス荒木の足どりを追って、ローマ、フィレンツェ、マカオと歩いた旅の記録は終わりです。日本へ帰ったトマスは、四年間の潜伏活動の後、捕らえられ、拷問の末、棄教しました。そればかりか、長崎の支配権をめぐる争いの中で、長崎代官である村山等安一家を陥れる駒として使われます。キリシタン追放令が出された際、村山一家は何人かの宣教師を洋上で奪取し、密かに日本に再潜入させ、折から大坂の陣において、大坂城に彼ら宣教師を送り込んだばかりか、大坂方の武器弾薬まで調達した疑いです。その証人として使われたのがトマス荒木でした。

トマスは、キリスト教を棄てることに何の負い目も感じはしませんでした。しかし、彼が妹のようにかわいがった、マリアの夫や家族を死に追いやったこと、そのマリアさえも、一六二三年、長崎の大殉教のとき、トマスの見守る中、殺されていき、結果として親しかった日本人キリシタンを死に追いやる片棒を担いだことが、彼の



元和の大殉教（マリー・ア木村・デ村山もこの殉教者の中にいた）

苦しむ原因となります。

当時の状況は、ただ彼一人がキリスト教を棄てて済む、そんな状況ではありませんでした。背教は裏切りを意味し、仲間への死を意味しました。彼に残された道は、キリシタン詮議役人の道しかなかったのです。

やがてトマスの勧めでローマへ旅だつたカスイ岐部神父が日本へと帰ってきました。彼は東北の水沢地区で潜伏活動中に捕らえられ、江戸のキリシタン屋敷で、役人となったトマスと再会することになります。彼の凄惨な殉教を目の当たりにしたトマスは、再び「自分はキリシタンだ」と言い出しますが、このときも穴吊りの拷問に堪えきれませんでした。

監視された生活の中で、自分の人生について考え、神について考え、考えては苦渋の中ですべてを否定する生活が続きます。……が、最後の最後、病に倒れた中で、彼を捨てていったと思ってきた母の声を聞きます。母の温もりを感じます。本当の自分の声を聞きます。

キリスト教でもなく、仏教でもなく、自分を生かす根元的な力、自分を自分たらしめるものの存在を、外にはなく自分の中に感じていきます。

そのとき、トマスの口から、本当の神を求める言葉が口について出ます。役人たちは、このことを長崎奉行に伝えます。

訳の分からぬ言葉を洩らすトマス

「老いて耄碌もうろくしたのであろう。そのままに捨て置け。」

こうして、トマスは狂人扱いされたまま、息を引き取りました。彼の最期を看取したのは、ローマ以来、彼と行動を共にしてきた印刷業者後藤宗因の息子後藤トメイ一人でした。一六四六年（正保三年）、トマス荒木、六十九歳を迎えた年のことです。

あとがきに代えて

「孤児たちのルネサンス」を上梓したとき、真つ先に感想を寄せてくれたのが、加藤賢一先生でした。先生は天文学畑の人ですが、「夕陽さんさん」という同人誌の顧問の先生でもあり、編集者だった僕も、おかげで親しくしてもらえ、拙い小説に高評を寄せてくださったばかりか、先生が大阪科学技術館で講演された際、拙著「孤児たちのルネサンス」の紹介までしてくださいました。

先生の書かれた感想文がうれしく、今も心に残っており、そこで、この「孤児たちのルネサンス」の取材紀行を書くにあたっては、ぜひ、この感想を「あとがき」として紹介させていただきたいと思った次第です。



私は天文を教えている関係で改暦にちなんでグレゴリオ十三世、無限宇宙論にからんでブルーノ、ガリレオ裁判にからんでベラルミノー枢機卿などの名前には親しみ、彼らの動きはプロテスタントにバチカンが対抗するための運動の中での出来事であったこと、同時代のドイツの天文学者ケプラーはプロテスタントだったため不本意な生涯を送らねばならなかったこと、江戸時代に盛んになった和算の起源がどうもコレジオでの数学の講義にあつたらしいこと、などを語り、巷間言われていることは違い、ガリレオ裁判が必ずしもコペルニクスの宇宙観の弾圧を目的としたわけではなかったことなどを語ってきました。しかし、こうした知識はことごとく書物から得たもので、決して自分で獲得したものではありませんでしたから、そこに何となく後ろめたいものを感じてきました。もともと、専門が科学の歴史であればそうは言っておれません、そうではないことをいいことに目を瞑ってきました。

このたび御著書を拝読し、よくお調べになっておられる様子がわかり、いかに自分の知識が薄っぺらなものであつたかに改めて気づかされ、頭を一撃されたような思いをしました。そこで、挨拶文を再度読み返してみたところ、「三十有余年あたためてきた」とありましたので、納得がいきました。おそらく天正少年使節団やキリ

シタン弾圧については小説を含む関係書籍がたくさん出ているんだろうとは思いますが、私はこれまでこうした分野に接する機会がありませんで、本書により、おかげさまでたくさんのお話を学ばせていただきました。厚く御礼申し上げます。ストーリーを通してフィクションも入っているのですが、大筋では史実をつなぎ合わせて構成されているものと推察致しました。その上、こうして小説・物語の形をとると実に人間味が出て、フィクションのはずなのに妙にリアリティが増してくることが面白く感じました。

本書で特にありがたかったのは、ブルーノと、南仏・スペイン南部と北の方のパリあたりに漂う雰囲気の違いの背景にある抗争が必ずしもイスラム文化圏との衝突だけではなかったこと、を教えてくださいただいたことでした。そして、今、カトリックはこの時代に似たような危機の中にあるのではないかとの思いを強くしました。当時はプロテスタント運動が、今は、現在の風潮が大きな敵として立ち塞がっているように見えます。もっとも、カトリック離れではなく、宗教離れなのかも知れませんが、本書は宗教に殉じた人たちの物語ですが、現在の宗教の位置を考える上でも大いに役立つのではないかと思いました。

そして、何にも増してありがたかったのは突っかからずに読み終えることができたことです。こねれた文章を書くのは容易ではありません。文章に接するお仕事をされて来られたことがよく分かりました。こうした方に「夕陽さんさんの会」誌の編集をしていただいていたとは、ありがたいやら、恥ずかしいやらで、冷や汗が出ます。なにせ、自分の文章を読み返してみても突っかからなかったことなど無いのですから。そもそも、これだけの字を書くだけで大変です。桐生さんはきちんと勉強された上に普段から文学に接して来られたのだらうとお察し致しました。本書はきつと大きな評価を受けるのではないかと思います。しかるべき人たちに出会え、正当な評価を得ることができるよう祈っております。

機会がありましたら一度、お話を聞かせてください。本書の内容でしたら何度もの連続講義ができますね。講演などがありましたらご案内いただけると幸いです。

全くのフィクションにはついていけない私にはとてもありがたい本書でした。御恵贈いただきましたことに改めて御礼申し上げます。ご健康に留意され、ご研究が進みますようお願い申し上げます。

バチカンの印刷機 ートマス荒木を歩くー

初版発行 2021 年 2 月 24 日
デジタル発行 2021 年 6 月 20 日

著 者 桐 生 敏 明
発 行 編集工房 DEP
奈良県北葛城郡広陵町三吉 3-4-15
TEL 0745-55-8522 FAX 0745-55-8440
PDF 制 作 編集工房 D E P

© Toshiaki kiriu, Printed in Japan 2021
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。